

戦前の雑誌記事にみる銘仙に関する記述とその変遷

— 婦人雑誌を中心に —

後藤 知美

本研究は、戦前の日本において、人々に日常着／外出着として愛用された絹織物「銘仙」への認識や位置づけの変遷を、雑誌記事中の銘仙に関する記述から明らかにする。日常着に着用されることが多かった銘仙は、明治時代後半から大正時代にかけて開発された模様表出の新技法を取り入れたり、高級品に用いる技法と図案を併用したりすることで、外出着としての商品価値を高めた。それに伴って、雑誌の誌面上での銘仙の評価軸は“丈夫さ”から“模様の美しさ”へと転化し、各銘仙産地への評価の言説も変化した。昭和時代が始まる頃には、銘仙の特集が婦人雑誌に盛んに生まれ、なかには編集部が百貨店や銘仙産地と協力し、銘仙の販売企画を展開する例もあった。昭和10年代を過ぎ、戦時体制への移行が強まると、銘仙は、その他の着物や衣類とともに古着の再利用や転用方法を取り上げる記事に登場するようになった。

キーワード：銘仙 婦人雑誌 百貨店 産地 流行

1. はじめに

本研究では、戦前期を中心に人々に愛用され、特に大正時代から戦前の昭和時代を中心に流行した織物「銘仙」について考察する。一般に、銘仙とは、先染めした糸で織った平織りの絹織物のことを指す。ただし、後に述べるとおり、銘仙市場の拡大に加え、各産地での技術開発や技法の多様化も手伝って、一口に「銘仙」と言っても広がりを見せることとなり、その内実は多様であった。

銘仙の一大産地として名を知られる伊勢崎（群馬県）や秩父（埼玉県）には、屑糸や玉糸（節のある太い絹糸）で織った「太織」が、銘仙のはじまりと伝わる。天明8年（1788）の『絹布重宝記』の太織紬の項には、「目専太織」の名の織物が登場する。

また、『守貞漫稿』（天保8（1837）年～嘉永6

（1853）年）にも、天保時代から「めんせん」が着られるようになったとある。同書は、この「めんせん」は、「繭織」あるいは「めいせん」が訛ったものとする。これら江戸時代後半の「めいせん」や「目専太織」が、そのまま明治時代以降に「銘仙」へと発展したかは、文字資料上では確認できない。しかし、これらの名称で呼ばれていた織物が存在したことは確かである。

現代における銘仙は、アンティーク着物の印象が強いかもしれない。戦前に生産された銘仙の中には、斬新で個性的な図案のものも多く、着物愛好家たちを魅了してきた。一方で、一部の研究を除けば、銘仙のような、近代の、しかも大衆向けに大量生産された織物はあまり注目されてこなかった。ただし、近年は、全国各地の美術館や博物館にて、銘仙収集家のコレクションを展示する機会も増えつつあり、調査・研究が進展している状況だ¹⁾。

本研究では、戦前の雑誌、特に女性向けの雑誌（婦人雑誌）における銘仙に着目する。明治時代

独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所
無形文化遺産部 研究員
(元東京家政学院大学非常勤講師)

の始まりとともに登場した雑誌は、明治27年(1894)の日清戦争をさかいに、マス・メディアとして本格的に成長を遂げた²⁾。明治時代後半には商業雑誌が次々に誕生し、人々の生活に浸透した。そのなかで婦人雑誌は、明治時代中頃に生まれ、明治30年代中頃から大正時代にかけて台頭し、数十万部の発行部数を誇る雑誌も登場するほどの成長を遂げた。

明治30年代には、印刷技術のさらなる発展によって、多色刷り大量印刷が可能になった。婦人雑誌は、衣類や生活良品の流行情報、話題の人物のグラビア写真、人気画家による流行の着物を着た女性の挿絵に彩られ、女性たちに最新の流行を伝える役割を果たした。

先行研究は、銘仙流行の最盛期にはこの婦人雑誌に、銘仙に関する記事が大量に掲載されていることを指摘する。安蔵裕子は、昭和時代に発行された新聞と婦人雑誌から、銘仙に関する記事を抽出し、往時の銘仙を取り巻く状況について整理した³⁾。誌面上の銘仙は、口絵やカラーグラビアとともに掲載され、購読者たちの購買意欲を刺激する役割を果たしていた。

ただ惜しむらくは、安蔵の作業は、銘仙流行の最盛期とされる昭和2年(1927)から7年(1932)に発行された雑誌に限定されており、銘仙の取り上げ方の変遷は明らかになっていない。ここでは、雑誌全体での銘仙に関する記述を概観した上で、安蔵が着目した前後の期間も含めて婦人雑誌における銘仙に関する記事を整理し、銘仙の取り上げ方や位置づけの変遷を明らかにする。

2. 調査概要

表1は、明治時代から昭和時代(戦前)の雑誌に掲載された銘仙に関する記事の一覧である。一覧は、『明治・大正・昭和前期雑誌記事索引集成』をもとに皓星社が作成したデータベース「ざっさくプラス」と、国会図書館の「国立国会図書館デジタルコレクション」を参照し、著者が作成した。本研究での考察はこの一覧を基本に進める。

「銘仙」という語が登場する記事を抽出した場合、その抽出数は膨大なものとなり、かえって銘仙の取り上げ方・位置づけの実態が曖昧となる。

したがって表1では、抽出対象を銘仙を主題とする記事や、タイトルに銘仙が登場する記事に限定した。

なお、抽出結果は、各データベースが採録する雑誌の掲載記事に限られる。当然、両データベースが採録していない雑誌にも銘仙を扱った記事は存在するものと予想されるが、全体の流れや傾向は、本調査法にて把握できると判断した。

3. 雑誌における掲載状況

図2は、表1掲載の銘仙に関する雑誌記事を「百貨店機関雑誌」、「婦人雑誌」、「集散地問屋情報誌」、「その他」、「染織業界専門誌」に分類し、年ごとの記事数を集計したグラフである。

まず、記事数の増減について概観していく。①大正3年(1914)年をピークとする明治42年(1909)頃から大正8年(1919)頃にかけての時期、②昭和2年(1927)をピークとする①の終わりから昭和7年(1932)頃にかけての期間に変動がある。②の時期の終盤にいったん減少した記事数は、昭和8年から再び増加するものの、以降の期間は突出して記事数が増える年はなく、増減を繰り返す。そして、昭和17年(1942)を過ぎると一気に減少する。

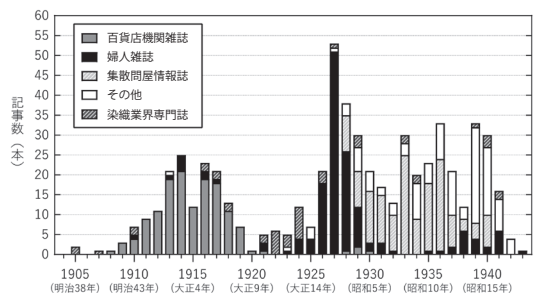


図2 雑誌に掲載された銘仙に関する記事数の推移

次に、掲載雑誌の性格に注目する。①の時期、つまり、明治時代後半から大正時代にかけての期間は、百貨店が取扱商品の宣伝・販売をするために発行した「百貨店機関雑誌」の記事が、大半を占める。百貨店機関雑誌での掲載がほぼなくなると、大正13年(1923)前後に婦人雑誌で銘仙に

関する記事が登場し始め、その後、急激な増加をみせる。この時期の婦人雑誌は、銘仙紹介のための口絵やグラビアページをふんだんに掲載していたため、雑誌1冊あたりの掲載頁数も増加した。

昭和3年(1928)になると、掲載雑誌に「集散地問屋情報誌」が新たに登場し、以降、その掲載数は増えていく。集散地問屋情報誌は、集散地問屋が、百貨店の流行情報を効率的に産地に流すため制作・発行した雑誌を指す⁴⁾。菱山相互会の『染織之流行』がその代表例であるが、現時点で類例は見つかっていない。

昭和5年(1930)頃から、婦人雑誌での記事数が減少するに代わって、「集散地問屋情報誌」が数を伸ばし、全体における主要な割合を占めることとなった。その後、昭和12年(1937)前後から、一時はほぼ掲載が見られなくなった婦人雑誌の記事数も復活し始めるものの、そこまで数を増やすことはなかった。加えて、この時期は集散地問屋情報誌の記事数も減少傾向を見せたため、結果的に「その他」の割合が大きくなった。

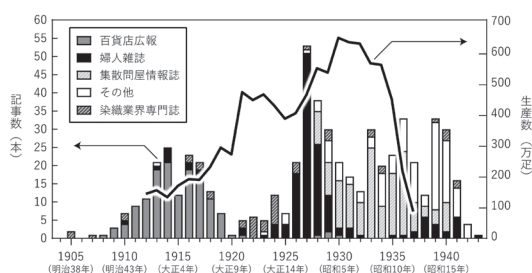


図3 記事数の推移と銘仙生産量の推移

記事数の推移は、銘仙生産の拡大と関係があるのだろうか。図3では、大正元年(1912)から昭和12年(1935)にかけての銘仙生産量の推移を、図2に重ねた。生産量の推移は、昭和13年度発行の『日本紡績年鑑』を参照し作成した。

図3で記事数と生産量のピークは、ずれをみせる。記事数が大正3年(1914)にピークに達する①の時期、生産量はほぼ増加し続け大正8年(1919)にピークを迎えた。その後、②の期間に入っても、生産量は年により増減を繰り返しつつも、おおむね増加傾向を見せる。昭和2年(1927)頃、

記事数が大きなピークを迎えた後、生産量については昭和5年(1930)のピークをさかいに減少していく。

二つの変動の関係を、記事数の増減を追いかけるように生産量が増減したとも解釈できる。銘仙流行の背景にあった様々な要素を詳細に検討する必要はあるが、流行を牽引した要素の一つに雑誌での注目があつたのではないだろうか。

4. 百貨店刊行の機関雑誌における銘仙

明治42年(1909)から大正8年(1931)頃まで、掲載記事の大半は、呉服店／百貨店の機関雑誌が占める。今回の調査では、三越呉服店(当時)の「みつこし(三越)タイムス」、「三越」、白木屋呉服店(当時)の「流行」、「白木タイムス」の掲載状況を確認した。

発行元である三越呉服店や白木屋呉服店は、江戸時代に創業した呉服店を前身に持つ老舗の呉服店／百貨店だ。三越は、延宝7年(1673)に駿河町で創業した呉服店「越後屋」が始まりである。明治37年(1904)に合名会社三井呉服店から株式会社三越呉服店に改称した際、アメリカのデパートメントストアを参考に店舗改革を進める抱負を宣言した「デパートメントストア宣言」⁵⁾で知られる。白木屋呉服店は、寛文2年(1662)に日本橋に開業した小間物屋を始まりとし、その後、江戸有数の呉服問屋に成長し、明治時代後半から大正時代に百貨店「白木屋呉服店(白木屋)」となった。三越、白木屋ともに「五大百貨店」のうちに数えられた、戦前の百貨店を代表する存在である。

「みつこしタイムス」は、明治41年(1908)に創刊の機関雑誌である。「みつこしタイムス」創刊以前、三越呉服店(当時三井呉服店)は、上流階級の得意客向けに、「花ごろも」(明治32年1月)、「夏衣」(同年6月)、「春模様」(明治33年1月)、「夏模様」(明治33年6月)、「水面鏡」(明治34年1月)、「みやこふり」(明治36年11月)と、おおよそ半年に1回のペースで冊子を配布していた⁶⁾。

これらの冊子をベースに、明治36年(1903)8月に創刊されたのが「時好」であった。「時好」が明治41年(1908)5月をもって終刊となった後、

同年6月には「みつこしタイムス」が刊行となった。明治44年(1911)3月には、新たに「三越」も創刊となり、一時は「みつこしタイムス」と「三越」を平行して刊行していたが、大正3年(1914)5月に「みつこしタイムス」は「三越」に併合となった。

「流行」、「白木タイムス」は、白木屋呉服店発行の機関雑紙である。同店発行の機関雑誌の歴史は、明治37年(1904)7月に発行された「家庭のしるべ」に始まる。明治38年(1905)12月に「家庭のしるべ」の最終号が刊行されると、翌年1月からは新たに「流行」の発行が開始となった。なお、「流行」は、大正7年(1918)3月に、誌名を「白木タイムス」に変更した。

呉服店／百貨店の商業戦略の一環を担った機関雑誌は、流行の宣伝と、通信販売を促進するための商品目録という二つの要素を基本とした。表1の百貨店機関誌の銘仙に関する記事は、後者の文脈で、つまり各店の取扱商品情報や目録に登場することが多い。

ただし、実のところ、表1記載の巻号以外にも、誌面に銘仙は登場する。「みつこしタイムス」以前の「時好」では、縮緬や御召等のその他反物に混ざって、銘仙の見本写真を掲載していた。また「呉服類代価表」を掲載した号には、対価表中に伊勢崎銘仙や(本)秩父銘仙、壁銘仙、縞銘仙、緋銘仙、紅梅織銘仙等の価格が掲載されていた。

「時好」では、衣類や小物、雑貨類の流行を紹介する欄を設けており、この欄で銘仙に言及することもあった。「節糸又は銘仙類にさしたる変化もない」(6(3)「流行の縞もの」・明治41年3月)、「縞物 地味向きの方に壁銘仙は近頃大なる売行あり」、「男物着尺 銘仙、節糸類の実用向きのものは廃りなく相変わらず一般に流行せり」(6(5)「流行の単衣」・明治41年5月)、「それ(著者註:壁御召)よりも廉なるものにては、壁銘仙あり」(6(5)「初夏の新装」・明治41年5月)がその例である。

後の「みつこしタイムス」「三越」でも、銘仙が登場するのは、反物見本写真を掲載する頁が中心であった。その他反物とともに見本写真が掲載された銘仙には、1反あたりの価格や色地や模様

の解説が付された。解説は「30歳以上の意気好み(原文ママ)の御婦人によろし」、「若き令嬢の御浴衣に面白し」(いずれも『三越』1巻8号・明治44年9月)等、着用に適した性別や年齢、好みを述べる場合が多い。こうした商品情報は、通信販売で購入する読者の購買の助けとなっただろう。

白木屋呉服店の機関雑誌も、三越呉服店の機関雑誌とほぼ同様の掲載傾向であった。「流行」の前身「家庭のしるべ」(1)には、反物の見本写真のなかに銘仙も登場する。その月の衣類や小物の流行を紹介する「流行案内」のうち、明治37年9月発行の(3)には、「伊勢崎銘仙 単物として需要多く、片端横縞の白っぽき色合の縞物大流行なり」とあった。

また、三越百貨店と同様、「呉服物代価表」には、銘仙の価格が掲載されていた。約1年半にわたる「家庭のしるべ」の発行期間中、6月から8月の夏時期には、壁銘仙、縞銘仙、緋銘仙、紅梅織銘仙の価格を、それ以外の時期には伊勢崎銘仙や秩父銘仙の価格を記載していた。この掲載状況は「流行」「白木タイムス」でも引き続き維持される。いずれの機関雑誌においても、銘仙が登場する箇所は、反物の見本写真と呉服物対価表が中心であった。

この時期の百貨店機関雑誌での銘仙の扱いは、店の多くの取扱商品の一つでしかなかったようだ。掲載情報は、商品の基本的な情報を顧客に伝える域を出ておらず、さらに言えば、その情報量を考えると、百貨店にとって主要商品ではなかったと思われる。百貨店機関雑誌は、流行を創り出し、発信し、鼓舞しながら、流行の商品を消費者に直接宣伝し販売する専門メディアとされる⁷⁾。しかし、機関雑誌のなかで、流行と関連付けて銘仙を取り扱っている例はわずかであった。この点は、銘仙流行への百貨店の関与が、婦人雑誌の誌面上で可視化される銘仙最盛期とは対照的な状況である。

5. 流行の胎動—明治時代後半から大正時代—

5-1 実用向きの着物、銘仙

婦人雑誌が相次いで創刊され発行部数を伸ばし

つつあった明治時代後半から大正時代、件数こそ少ないものの、その誌面には銘仙を取り上げた記事が見られる。

同時期の銘仙の位置づけを示す記事が、「私は銘仙党です—某理学博士夫人—」（『婦人雑誌』5(4)・大正5年4月）、「銘仙主義の勝利と一汁一菜主義」（『婦人之友』15(1)・大正10年1月）の2つである。両記事は、「理学博士夫人」や「夫が相当の地位にあった」女性、すなわち社会的地位が比較的高い男性を夫に持つ女性からの寄稿であった。

「某理学博士夫人」は、結婚以前の娘時代から日常着に銘仙を愛用しており、結婚後もそのまま銘仙を着用し続ける女性である。記事の中で彼女は、夫には「お前、もう少し軟かな物を着てはどうか、お客様でもあると不細工だから」と言われると述べつつ、子どもの面倒を見るのに忙しく、御召や縮緬では衣服の心配をしてしまうため、十分に働けないと主張する。女性によれば、丈夫で、価格も木綿と変わらず、家庭で洗濯ができて退色も少ない銘仙であれば、衣服に気を遣わず働けるというのである。

家庭で洗濯できる点は銘仙の利点と捉えられていた。大正10年(1923)6月刊行の『主婦之友』5(6)は「家庭で出来る銘仙やモスリンの洗い張の仕方」を掲載している。記事では、冬の衣類を梅雨入り前に洗濯すること勧め、「一般の家庭で多く着用される、銘仙、双子、縞木綿、モスリンなど」の洗濯法を解説している。一方、前掲記事にも登場した縮緬や御召については、「本職の手に託した方が、却って経済上よろしいです」と述べる。

『婦人之友』15(1)に寄稿した女性は、同誌12(12)(大正7年(1918)12月)「我国中流の服装に対する提議」に登場する「銘仙主義」⁸⁾に感化され、銘仙を日常着にした女性であった。彼女の住むところは、「兎角身なりを飾りたがる」土地で、ちょっとした訪問でも縮緬や御召を着用するのが通常であったという。記事中、外出着に銘仙を愛用し始めた当初は、夫の地位のこともあって「あの奥様が銘仙で」と陰口をたたかれたと女性は振り返る。

にもかかわらず、2年後の現在では、「『出ず入らずで宜しうございますね』などとお仲間が沢山出来て参りました」と女性は報告する。彼女によれば、銘仙を愛用する人が増え、外出時の身なりも簡素になったため、婦人会にも出やすくなったと周囲で好評だという。彼女は、着物が傷むことを恐れるあまり、ちょっとした外出にも、天気への心配や車の手配が必要だったかつての煩わしさから解放された喜びを報告していた。

彼女たちの報告に登場する周囲の反応から、記事の掲載当時、銘仙は、来客への対応や外出にはあまり相応しくないと認識されていたと考えられる。彼女たちが、婦人雑誌を購読できる一定の生活水準を満たす世帯に属する女性⁹⁾であることを考えると、なおさら来客時や外出時に“それなり”の格好を求められたことは想像に難くない。

しかし、女性たちは、周囲からの反応に反して、銘仙を日常の衣服に選択した。それは、自分たちの日常生活に適した経済的合理性を評価しての判断であった。婦人之友15(1)の記事は、特集「旧思想旧習慣に打勝ち得た愉快」の一つである。彼女にとっては、身なりを着飾って生活上の不便を感じることは「旧習慣」であったのだろう。

女性たちが生活に取り入れた銘仙の丈夫さは、そのまま、当時の銘仙の品質を評価する軸でもあった。『婦人週報』3(6)(大正6年(1917)2月)掲載の「織物研究 銘仙の見分け方」は、銘仙産地ごとの特徴をまとめ、銘仙の良し悪しの見分け方を解説する記事である。記事によれば「織物の品質は大概其の産地で善悪を見分ける事」ができるという。

記事がもっとも高く評価したのが「節糸・玉糸で織った」銘仙であった。これらの銘仙のことを「品質もよく、耐久性もよくて、最も経済的です」と述べる。次点は絹紡糸を用いた銘仙で、節はないものの耐久性でやや劣ると位置づけ、柞蚕糸を用いたものは「一層悪い」、「洗濯すると縮むので一般には好まれない」と評価した。

産地の特徴を述べる箇所では、節糸・玉糸を用いるのが秩父、伊勢崎も元々は節糸・玉糸を用いていたものの、最近では絹紡糸を混ぜ、一部の伊勢崎銘仙や足利、越後地方では、緯糸や経糸に互

糸糸を用いると解説している。そして、「新節」「新銘仙」と売り出されている銘仙を、耐久性の点で評価の低い、柞蚕糸を使った製品と述べる。

節糸・玉糸を用いた秩父銘仙／絹紡糸を用いた伊勢崎銘仙という表現は、他記事にも頻繁に登場する。特に秩父銘仙は、「実質本位」（『主婦之友』8(2)「秩父銘仙の機場を視る記」・大正13年(1924)2月）と表され、日常での利用に適した丈夫な着物としての評価を受けていた。その評価を裏付けるかのように、明治時代後半から大正時代にかけての婦人雑誌には、秩父銘仙の広告や製品紹介が頻繁に登場する。しかし、この好意的な評価は、大正時代が終わり昭和時代が始まる頃に大きく覆ることになる。

5-2 “よそ行きの着物”としての銘仙

銘仙への“日常に便利な質実な着物”との評価は、大正時代が終わりを迎える頃に変化を見せる。大正14年(1925)10月刊行『婦女界』32(4)「今秋の流行色と銘仙の新柄」では、銘仙を「平常着にも、外出着にも用いられますので、銘仙位各方面に用いられるものは少ないのです」と述べる。また、大正15年(1926)4月刊行『主婦之友』10(4)の「銘仙程度の春の流行界」には、「以前から銘仙は実用向とされておりましたが、近頃のように精巧なものができるようになりましては、結構訪問着の代用ともなりましょう」とある。

両記事から、銘仙＝実用向きの着物との位置づけから、その掲載時期には、「外出着」や「訪問着の代用」（よそ行きの着物）としても銘仙が着用されるようになっていたことが分かる。言い換えれば、この時期、『婦女界』や『主婦之友』の編集部や購読者層にとって、銘仙を「外出着」や「訪問着」として着用することは、選択肢の一つになっていたと言えるだろう。

銘仙の生産量が拡大する大正時代後半から昭和時代の初めにかけて、新たな模様表出の技法が考案され、多色を用いた様々な模様が表された¹⁰⁾。新たに生まれた技法に、明治40年前後に、秩父や伊勢崎等が開発した「ほぐし織」がある。経糸に型紙捺染を施すこの技法の登場によって、曲線や多色使いの自由な緋模様を織り出すことが可能

となった。

現在、「銘仙」の名で想起される、ほぐし織を用いた「模様銘仙」が一般に流行したのは、大正時代から昭和時代にかけての時期であった¹¹⁾。「ほぐし織」技法の登場と普及により、銘仙は新たな商品価値を獲得し、その動きが銘仙着用の機会の拡大と重なって後の流行を後押しした。新たな技法の導入に加え、高級品に使用される技法や図案が銘仙に取り入れられるようになったことで、銘仙のよそ行きの着物としての性格はさらに強まったと考えられる。

「今秋の流行色と銘仙の新柄」（『婦女界』32(4)）では、前述の引用部に「…(略)…銘仙の染色技術は年毎に目立って進化しました。初めは縞か緋に限って単調な柄ばかりでしたが、染め銘仙が出来るようになり、染と織の併用品があり、且つ染め模様のようなものを上手に織ることも出来るようになりました。」と続く。そのうえで、「友禪や染物の高級品に、盛んに用いられている匹田染を織り出し、お召などにのみ限っていた縞と緋の併用、緋と模様の併用までも巧に見せた新柄がたくさん出てきました」と今秋の銘仙を紹介していた。

「銘仙程度の春の流行界」（『主婦之友』10(4)）でも「今春は、一体に絞り風のものが多いのですが、この銘仙類にもお若い令嬢向には流行色を基調として、匹田や鹿子を巧みに応用して織りだしたのや、絞って染めたのがでてきてまいりました」、「銘仙の糸でお召風に織った上品な緋」との記述があり、流行にあわせ様々な技法や糸を併用した銘仙が生産されていたことが分かる。しかも併用する技法やその組み合わせは、友禪や御召、縮緬といった、銘仙より高級とされる着物に用いるものであった。

同様の流れは、銘仙の図案にも見られる。大正15年(1926)9月発行の『婦女界』34(3)は、銘仙の新柄「秋のおとずれ」を絵付きで紹介する。解説によれば「秋のおとずれ」は、「銘仙という感じは全然脱し、縮緬などにある程度の新柄」であった。同号掲載の「初裕用の新柄銘仙」でも、今秋の銘仙新柄を「以前は模様銘仙の新柄と言ってもやはり銘仙式の新柄でしたが、今年のものなどは、ずっと高級品にある図案と殆ど同じ」と述

べる。各記述は、高級品に用いる技法や図案を強調し、従来のイメージからの脱却を図ろうとしている。

鷺田祐一は、明治時代中期以降に「中間層¹²⁾」が成熟したことで、それまで大きく分断されていた、富裕層を対象とする高級和服市場と一般市民が日常作業用に着る和服の市場の中間に、略服市場が生まれたと指摘する¹³⁾。この略服市場の代表的商品が銘仙であった¹⁴⁾。さらに、その後の中間層消費の更なる進展によって、この市場はその下の価格帯にまで拡大することとなった¹⁵⁾。

大正12年(1923)に発生した関東大震災を契機に、販売戦略を大衆向けに転換し始めた百貨店は、よそ行きの着物としての性格を強めた銘仙を戦略的に取り入れた。震災後、大阪や東京の百貨店が開催する銘仙の特売会は急増し、銘仙の流通や販売に百貨店が大きな役割を果たした¹⁶⁾。

確かに、先述の『婦女界』32(4)の記事が紹介する銘仙は、「三越呉服店の特製品」であり、購入に際しては婦女界社代理部が取り次ぐとあった。先に言及した『婦女界』34(3)が紹介した「秋のおとずれ」も三越呉服店考案部の商品である。各百貨店が作らせる銘仙が、婦人雑誌に登場する例を見ると、前章で整理した、百貨店機関雑誌での取り上げられ方とは異なっており、銘仙が百貨店の有力商品へと成長し始めたことが、記事からもうかがえる。

6. 銘仙流行—昭和時代初期—

6-1 産地評価の転換

銘仙がよそ行きの着物としての性格を強めていくなかで、雑誌の購読者は日常の労働や生活に耐える耐久性よりも、流行を踏まえた外出着としての魅力を重視するようになったと考えられる。銘仙の評価軸は“丈夫さ”から“模様の美しさ・鮮明さ”へと移り、誌面上での各銘仙産地への言及にも変化が生じた。これまで丈夫さゆえに評価が高かった秩父銘仙に代わり、模様が鮮明で柄行が良いと評判の伊勢崎銘仙が高い評価を受けることとなったのである。

昭和2年(1927)2月発行の『婦女界』35(2)掲載の「お召や銘仙の見分け方」は、この転換を

示す好例である。記事は、「地質も丈夫で、洗い張りも利く」ため愛用者が多い、御召や銘仙の品質の見分け方を解説する記事であった。記事の内容や趣旨は、4-1で紹介した『婦人週報』3(6)や『主婦之友』8(2)の記事と似通っているにも関わらず、産地への評価は一変している。この記事中、最も高い評価を得たのが伊勢崎銘仙であった。

記事は「伊勢崎銘仙が一番優勝である」と述べ、理由を「地肌が綺麗で、模様が鮮明」と説明する。伊勢崎の次に評価しているのが足利で、「加工は足利の方が優れています」の言葉から分かるとおり、模様を織り出す技術に注目し好評価を下していた。対する秩父銘仙については、「経糸緯糸共に玉糸を用^{つか}ってあるので、地肌がきたなく、模様も伊勢崎、足利のように鮮明ではありません」と述べる。かつてその丈夫さを保証するとされた特徴、玉糸を用いる点が、模様の鮮明さを重視するなかでは、短所と見なされるようになった。

産地評価の転換は、同時期の他記事でも確認できる。昭和2年(1927)9月発行の『婦女界』36(3)掲載の「銘仙の種類と産地」も、各産地を紹介する記事の一つである。当記事中でも、秩父銘仙は、玉糸を用いるため丈夫であるものの、「柄も思うように鮮明に行かず、色も出難いようです」、「模様物は伊勢崎銘仙に到底及ばない」と低評価であった。

一方の伊勢崎銘仙は、かつては耐久性の点で劣ると評価された絹紡糸の利用ゆえに、「染つきも良く」、「模様も自由に」織り出すことで、伊勢崎は「優秀な模様物」を生産できる産地と紹介されていた。「この頃では秩父よりはずっと生産数も多く」、伊勢崎銘仙は「現代的の必需品」と称されていた。

伊勢崎銘仙優勢の状況は、統計資料からも明らかであった。図4は、大正時代から昭和時代にかけての各産地(秩父、伊勢崎、足利、八王子)の銘仙生産量の推移を示した図である。同図は、図3と同様、昭和3年度発行の『日本紡績年鑑』を参照し作成した。大正時代からこの時期までの各産地の生産量は、全体として増加傾向にある。ただし、そのなかでも、大正14年(1925)から昭

和5年（1930）にかけての5年間に注目すると、秩父に比べ、伊勢崎や足利は急激に生産量を増加させている。

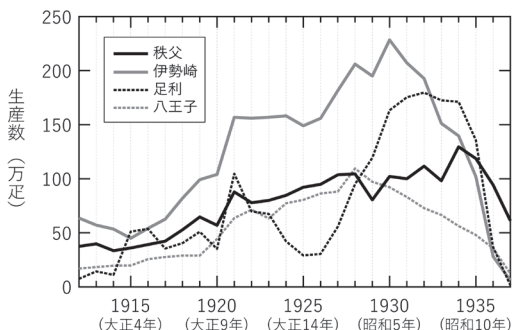


図4 各産地の銘仙生産量の推移

模様銘仙流行の背景を、伊勢崎を例に考察した山内雄気は、大正14年（1925）頃からの伊勢崎銘仙の総生産量の急激な拡大を支えたのは、「文化銘仙」と「模様銘仙」だったと指摘する。それまで生産の多くを占めていた銘仙縞や銘仙緋の生産量が減少したにも関わらず、この時期に総生産量が拡大したのは、それ以上に「文化銘仙」と「模様銘仙」の生産が増加したためであった¹⁷⁾。

伊勢崎で言う「文化銘仙」とは、絹紡糸と玉糸を用いて力織機で製織した織物を指し、その模様表現技法によって、文化縞銘仙、文化模様（ホグシ）銘仙、文化メ切銘仙、文化御召の4種に大別できる。山内によれば、「文化銘仙」の生産量の内訳は、模様銘仙が大半を占めていた。手織りの「模様銘仙」の生産量が昭和時代初期に横ばいとなるなかで、「文化銘仙」の生産量は昭和10年代まで拡大し続けた。

外出着としての銘仙の流行は、その生産に適した産地の生産拡大に繋がったと考えられる。そして、この銘仙大流行の時期、更なる需要の拡大のため、雑誌編集社、百貨店、産地が連携した販売戦略が取られた。

6-2 「主婦之友伊勢崎銘仙」

銘仙流行が最盛期を迎えるこの時期、婦人雑誌は、各雑誌名を冠した銘仙の販売企画を掲載し

た¹⁸⁾。昭和2年（1927）10月発行の『主婦之友』11（10）は、伊勢崎織物同業組合と協力し「主婦之友伊勢崎銘仙」を売り出す企画を催した。編集部は「今秋流行の中心となるべき主婦之友伊勢崎銘仙！」で、企画の経緯を「何処の家庭に於いても、最も実用的の召物として歓迎を受けている銘仙の向上を期するため、伊勢崎織物同業組合とはかり、今秋の流行を代表する、主婦之友伊勢崎銘仙の新柄を創案して発表することにいたしました」と説明する。

企画の一部商品の図案は、漫画家や画家に依頼し制作された。『主婦之友』11（10）の「主婦之友伊勢崎銘仙」では、漫画家の田中比左良、画家の田中良や林唯一が図案を考案した。いずれも、この時期の婦人雑誌や少年少女雑誌にその作品が掲載されていたり、紙面の挿絵や口絵を手掛けていたりした人物である。おそらく『主婦之友』読者にとっては、お馴染みの存在だったであろう。

特に、林唯一は、同誌で連載された吉屋信子の「空の彼方へ」（昭和2年4月～昭和3年4月）の挿絵を担当していた。「空の彼方へ」は『花物語』の成功によって、少年少女小説の分野ですでに一定の評価を受けていた吉屋の連載小説である¹⁹⁾。自らが愛読する小説の挿絵画家が考案した図案は、読者たちの注目を集めた。

画家や漫画家に依頼したもの以外は、「本年の流行色、その他のヒントとなるべき材料」を、編集部が織物図案の専門作家に提供し考案してもらった図案だった。商品紹介に「編集局の特選」という表現が登場することから、考案された複数の候補から、編集部が売り出す商品を選出したものとする。

誌面に掲載される「主婦之友伊勢崎銘仙」の商品写真には、反物の見本写真ではなく、着物に仕立てた銘仙の着用写真が採用された。そのモデルをつとめたのは、岡田嘉子、水谷八重子、村田嘉久子、栗島すみ子、松井千枝子、森律子といった、当時の舞台や映画界で活躍する有名女優たちであった。

企画趣旨を述べる頁は、編集部の告知とともに伊勢崎織物同業組合長の言葉「伊勢崎銘仙について」を掲載しており、この企画が組合の全面的な

協力の下にあったことが分かる。組合長は、伊勢崎銘仙は組合で綿密な管理ゆえに「品質本位においてその類例を見ない」と述べ、伊勢崎銘仙の品質の確かさと、それを叶える技術の高さを強調していた。

この強調は、商品写真の解説にも散見された。「これほど精巧な出来栄えは銘仙として前例のないこと」、「これだけのものが織り出されるようになったことは伊勢崎織物組合の誇りのみではなく日本機業界の誇り」、「これほど美しい色目の模様物が織り出されたのは、これが初めて」と自画自賛の言葉が並び、産地側にとっても力を入れた企画であったと推測される。

「主婦之友伊勢崎銘仙」は、主婦之友本社や百貨店・呉服店で陳列され、雑誌購読者が各店舗に出向けば自らの目で実際の商品を確認することもできた。同誌11(10)や11(11)では、商品の陳列を行う全国106か所の百貨店・呉服店の一覧と陳列会期を告知している。

また、企画には、商品購入者が一反購入するごとに、桐箆や鏡台、座布団、化粧品のセット等の景品が抽選で当たる大景品会も含まれていた。大景品会の詳細は同誌11(10)にて「主婦之友伊勢崎銘仙」の紹介とともに告知され、当選者は2か月後の11(12)誌面で発表となった。

雑誌編集社、百貨店、産地が協力し、数カ月にもわたった銘仙販売企画は、成功だったようだ。その後の『主婦之友』は、2回、同様の企画を実施している。昭和3年(1928)10月・11月発行の『主婦之友』12(10)と12(11)、および昭和4年(1929)10月発行の『主婦之友』13(10)である。いずれの販売企画も引き続き伊勢崎織物組合との共同企画であった。

『主婦之友』12(10)は、「秋の流行を代表する新柄の発表」と題し、41点の「主婦之友伊勢崎銘仙」を紹介している。前年の企画での7点に比べ、扱う銘仙の数は大幅に増加した。記事では、またしても編集部が、「主婦之友伊勢崎銘仙」は織元の伊勢崎織物同業組合の監督の下、採算を度外視し生産しているため、柄と品質が良く、そのうえ通常の商品より安く提供できるとアピールしていた。

前年の企画では百貨店・呉服店での陳列会を開催したが、今回は「伊勢崎銘仙即売展覧会」であり、誌面に掲載された呉服店／百貨店に行けば、その店で商品を購入できた。また、この年の企画でも景品が当たる抽選会が行われた。一反購入するごとに、購入者には景品券が配布され、券を用いて編集部申し込むと、抽選で桐箆や、衣装、服飾小物等の景品が当たった。景品は腕時計や写真機を含んだ、前年よりさらに豪華な内容であった。抽選結果は、昭和4年(1929)2月発行の『主婦之友』13(2)で発表された。

各銘仙の図案は、前年の企画同様、画家や漫画家に考案を依頼したものと、編集部で選んだものがあつた。本企画では、さらに図案考案者を増やし、日本画家・洋画家・工芸家、閨秀画家と称された女性画家の総勢11名に依頼している。依頼した人物には、伊東深水や杉浦非水等の著名な人物も含まれ、やはり前年の企画に比べて規模を拡大したとみてよいだろう。

全商品の模様見本の写真は、図案のタイトルと簡単な解説文を添え、カラーにて誌面に掲載していた。41点の模様見本は、「7・8歳の子供さん柄」(その一)、「20歳ごろから24・5歳ごろまでのお嬢さん向きの柄」(その二)、「24・5歳から34・5歳の方に向く柄」(その三)、「40歳前後の年輩向きの新柄」(その四)に分けられ、全4ページにわたって掲載された。この年の「主婦之友伊勢崎銘仙」の着用年代は、女兒から中年女性まで幅広く設定されていたと考えられる。

全41点から、編集部が選出した20点については、前年と同様、有名女優たちの着用写真を掲載し、詳細な紹介文を付していた。表5には、各商品名・模様見本の紹介文、価格を示した。また、図案考案者がいる商品の場合は考案者の氏名、着用写真が掲載された商品の場合はモデルを務めた女優の氏名を示した。

商品の解説は、模様自体の解説にとどまらず、かなり詳細かつ幅広い内容であった。「かべ織お召幾分小柄の方向き」(霞八丈)、「肥り気味の方もすらし」(しま市松)、「あどけない日本髪のお嬢様向き」(矢羽根くずし)のように、その柄が

表5 『主婦之友』12(10) 掲載「主婦之友伊勢崎銘仙」の商品情報

	商品名	紹介文	図案考案者	着用写真	写真モデル	価格
その一	1 九重	羽織に着物に可愛らしい		●	絲子	18円50銭
	2 かがやき	断髪の子どもさんに似合いし柄	杉浦非水	●	小櫻葉子	14円80銭
	3 若き日	流行色の紫が素敵な出来栄え		●	入江たか子	12円80銭
	4 おじさい	それは着晴れのする上品な仕上がり	伊東深水	●	入江たか子	12円50銭
	5 あげぼの縞	軟らかい感じのする現代的縞柄		●	夏川静江	13円80銭
	6 春日	羽織柄としてゆかしきもの	生田花朝	●	夏川静江	12円50銭
	7 霞八丈	かべ織お召幾分小柄の方向き		●	鶴間蔦枝	14円50銭
	8 にしき葉	表紙絵でお馴染みの岡先生の筆	岡吉枝	●	小林延子	13円30銭
	9 瑞祥	栄えある御大典を祝して	和田三造	●	水谷八重子	13円80銭
	10 五節しほり	羽織よりも着物に向く銘仙	藤井達吉	●	崔承喜	13円30銭
	11 矢羽根くずし	あどけない日本髪のお嬢様向き		●	村田竹子	11円50銭
	12 草にしき	羽織に仕立ててはえる新柄				17円80銭
その二	13 慶満草	上品な女学生向の軟味ある柄	田中良	●	安子	13円80銭
	14 豊稜	はっきりとした感じの現代柄	山田正一	●	塚光代	13円30銭
	15 らんたつ	誰方がお召しになっても向く		●	東日出子	9円
	16 ざくろ	若奥様の書生羽織に宜しきもの	生田花朝	●	巴玲子	12円50銭
	17 野路	羽織と対に仕立てると良い柄	田中比左良	●	梅村蓉子	13円50銭
	18 天平のおもかけ	着物にも羽織にも好ましい柄		●	東日出子	12円30銭
	19 格子がすり	現代向きの至極きっぱりした柄		●	森律子	13円50銭
	20 雲の柱	万人好きのするおとなしい柄		●	巴玲子	12円30銭
	21 月光	仏蘭西絹のような軟らかい配色		●	夏川静江	12円30銭
	22 夕ばえ	すっきりとした良い柄		●	入江たか子	12円30銭
	23 ベルシャ模様	着物より羽織にしたい柄ゆき		●	石井小波	12円30銭
	24 みやび	地織は評判のかべお召です		●	石井小波	13円50銭
その三	25 小草しほり	紫の地色が良く上っています	藤井達吉	●	梅村蓉子	12円80銭
	26 慶び草	クローバーを模様化したもの	木谷千種	●	梅村蓉子	12円80銭
	27 しま市松	銀鼠に流行色で織ったもの		●	栗島澄子	12円30銭
	28 モダン	線と丸の模様緋で羽織向き				12円50銭
	29 銀杏	羽織にも着物にもなる柄ゆき				11円80銭
	30 南蛮縞	黒衿を掛けても似合う意気柄				11円80銭
	31 うろこ小紋	誰にも似合う温良向の羽織柄		●	河村菊江	11円30銭
	32 芽やなぎ	着物柄として渋味のあるもの	伊藤小坡	●	河村菊江	12円80銭
	33 花びし	誰方が召しても気が利きます		●	森律子	9円85銭
	34 プリズム	黒地にくれないと白の入った変り緋				11円30銭
	35 江戸縞	婦人の召物にも丹前にも良し				11円80銭
	36 手綱がすり	着物羽織ともに良い変り緋				12円30銭
その四	37 横じま小もん	小紋に縞をあしらった新意匠の緋				13円30銭
	38 おらんだ縞	ちょっと前掛でもしめてみたい気がします				12円30銭
	39 たてあじろ	着物柄として暗い好みで誰方が召しても良い柄				11円80銭
	40 つづれ雲	羽織にも着物にも向く年輩向けの好ましい柄				13円30銭
	41 おぼろ緋	流行色でおぼろに織った新柄緋銘仙				13円80銭

似合う体形や髪形について言及するものや、「若奥様の書生羽織に宜しきもの」(ざくろ)、「黒衿を掛けても似合う意気柄」(南蛮縞)と反物の仕立て方について触れるものがあった。

さらに言えば、全体での組み合わせ、現代で言うところのコーディネートに関するアドバイスを含む解説もあった。例えば、「ほっそりとした方には、模様は横に通るように仕立て、大柄の方には模様が互い違いになるようにお仕立てくだされば、さらに一しおの美を添えるようでございます」(あじさい)、「これを素裕に仕立て、黒縹子の襟をかけた前掛姿の下町好みも、これまたなかにきりっとしたものであります」(花びしと格子がすり)等が挙げられる。

続く『主婦之友』12(11)(昭和3年(1928)11月)掲載の「今年の流行を代表する大評判の主婦之友伊勢崎銘仙」は、図案を考案した画家や着用写真のモデルとなった女優たちが、自らが考案・着用した銘仙についてコメントを寄せる記事である。また、同号掲載の「売り切れぬうち!! 機止めにならぬうち!! 主婦之友伊勢崎銘仙を」では、大景品会の案内を再度掲示し、申込者に商品の色刷りカタログを郵送する旨も告知していた。

翌年の昭和4年(1929)10月発行の『主婦之友』13(10)には、再び、その年の流行を踏まえて制作した「主婦之友伊勢崎銘仙」38点が誌面を飾った。企画自体の構成は、一昨年や前年とほぼ同内容である。ただし、幅広い世代の着用を想定した前年に比べ、その着用対象は15歳~25歳の若い女性に狭まっていた。若い女性が着用する前提の上、「羽織姿の若奥様」、「明るい感じのお嬢様」、「品の良いモダンな令嬢」と模様の醸し出す雰囲気の商品を区分しているのが、この年の特徴である。

38点という点数の多さにもかかわらず、この年の商品写真は、すべて女優の着用写真であった。前回企画と同様、写真解説は、各商品を着用するに適した年齢や属性、雰囲気、各反物の仕立て方や組み合わせを詳細に説明していた。

例えば、「緋のはっきりとした、モダンな羽織柄です。こうした柄はやや小作りの方が召せば、却って大きく見えると、花柳さんが座談会で話さ

れました」(レビュー)、「感じの明るい、生き生きした柄です。学校通いのお嬢様のものに仕立てれば、さぞや似合はしいお召物ができましよう」(ジャズ)、「着流しで、黒衿をかけてもいい柄です。帯に印度更紗の腹合でも、もってくれば、それこそ、五分もすかさぬ意気好みになります。12(雪明り)の羽織を合せますと、きりっとした奥様好みにもなります」(ははき木)といった具合である。

また、同号では、「主婦之友伊勢崎銘仙」紹介の一環で、女優や役者、画家、工芸家7名での「銘仙についての座談会」の様子を記事化している。座談会のメンバーは、遠藤波津子(美容家)、森律子(女優)、栗島すみ子(女優)、田中良(挿絵画家)、花柳章太郎(役者・女形)、山下栄蔵(工芸家)、下条雄索(伊勢崎織物同業組合長)の7名である。座談会の話題は、その年の企画で制作された38点の銘仙の品評から、銘仙制作の技法や、羽織と着物の合わせ方、品質の見分け方と着付けのコツ、洗濯法や手入れの仕方にまで及んでいた。

6-3 「八王子高級文芸銘仙」

雑誌の産地紹介にしばしば登場してきた産地に八王子がある。八王子はもともと男物の着尺地の生産で一定の評価を得る産地であった。明治10(1877)年開催の第1回内国勸業博覧会でも、複数名、織物で褒状を授与された人物がいることが分かっている²⁰⁾。しかし、銘仙生産で知られるようになるのは、女物の着尺地に力を入れ始めた大正時代以降のことであり、他産地に比べると後続であった。

『主婦之友』との連携を強める伊勢崎に対抗するように、八王子は『婦女界』と協力し銘仙の販売企画に取り組んだようだ。昭和3(1928)年10月発行の『婦女界』38(4)は、八王子の「文芸銘仙」の販売企画を掲載している。

企画の少し前、同年2月の『婦女界』38(2)掲載の「図案に新機軸をみせた春の銘仙」では、各産地を評するにあたって、「近年、中幸商店では全国で最も優秀な織物銘仙を織出すに至り、一躍八王子は銘仙の産地として最も有名になりました」、「八王子物は伊勢崎銘仙と同じく、地肌が非

常に滑らかで、模様が鮮明です」と八王子に贅辞を送っている。婦女界編集部は販売企画以前から、八王子銘仙を売り出そうとする思惑を持っていた可能性がある。

この『婦女界』38(4)における八王子銘仙の販売企画は、『主婦之友』誌上の販売企画と同様の構成であった。企画では、専門家の協力を得て編集部で選び出した30柄を「高級文芸銘仙」として誌上で紹介し、あわせて全国の百貨店・呉服店で売り出した。もちろん誌面には、「八王子高級文芸銘仙」を売り出す店舗一覧も掲載された。購入者には1反につき1枚景品券を配布し、抽選で豪華景品が当たる点も、『主婦之友』の企画と同様である。

商品写真は『主婦之友』での企画とは、やや趣を異にする。人気女優がモデルを務めた『主婦之友』に対し、『婦女界』の着用写真は、多くが一般の女性モデルを使っている。そのなかにおいて一部商品については、小説家・劇作家の久米正雄夫人や、箏曲やうた沢節演奏家の息女の着用写真を掲載していた。ただし、彼女たちの写真は、他写真と異なり、育児や稽古事をする様子等、日常生活で銘仙を着用する様子を映したものであった。これらの写真は、商品の魅力を購読者に分かりやすく示すためというより、むしろ著名人物の家族が商品を着用している印象を与える効果を狙ったものだと考えられる。

その狙いは、解説記事「八王子文芸銘仙の出来るまで」でより鮮明に示される。八王子銘仙の品質がいかに優れているかを力説する記事は「松平節子姫の御調度中に銘仙を」という小コラムを掲載していた。コラムでは、今回、制作した文芸銘仙3点を、松平節子に献上したところ大変喜ばれたエピソードを紹介している。松平節子は、この年の9月、昭和天皇の次弟・秩父宮雍仁親王との婚儀を行っている。コラムでの記述は、皇族に嫁いだ女性も誌面の商品を着用していると読者に印象付けようとするものであった。

多少の違いはあれ、『主婦之友』での企画と大きな違いはないと思える『婦女界』での販売企画だが、『主婦之友』の企画とは異なる独自性もある。それが商品の名称ともなっている「文芸」と銘仙

の関連づけである。誌面で発表された30点の銘仙のうち、「朝の楽譜」、「夜曲（ノクターン）」、「月光の曲」は、当時の娯楽小説に登場するヒロインをイメージした商品であった。「三小説の三ヒロイン」の解説は、「朝の楽譜」は『愛人』の志摩子、「夜曲」が『明眸禍』の珠子、「月光の曲」は『地霊』の明子をイメージしたと説明する。

この3小説はいずれも、『婦女界』での連載小説であった。『愛人』は細田民樹の小説で、大正15年(1926)9月から昭和3(1928)年12月まで連載された。主人公・志摩子が、幸福な家庭と学問上の成功を得るまでの様子を描いた小説である。物語の中心は、志摩子と、縁談相手である新聞社御曹司・日高を巡り恋敵となった妹・時枝とのやり取りや、日高との破局後、新たに思いを通じた画家・紺野と、紺野の学生時代からの恋人・令子との関係であった。

菊池寛の作品『明眸禍』は、昭和3年(1928)1月から翌年10月まで連載された。美しい瞳を持つ珠子が、その美しさゆえに周囲の男性から思いを寄せられ続け、苦難の道を歩む物語である。『地霊』は中村武羅夫の作品で、昭和2年(1927)1月から昭和4年(1929)4月まで連載された。思いが通じ合う恋人がいたにもかかわらず、事情によって愛してもいない別の男性と結婚せざるを得なかった主人公・明子は、結婚後は夫の不義によって悩み苦しむことになる。小説の最後では、彼女は自分の子供を残して家を出ていく。

こうした、家族や恋愛、結婚生活をテーマに女性読者向けに書かれた小説は「通俗小説」と呼ばれ、各雑誌の発行部数を左右するほどの影響力があった²¹⁾。雑誌編集者側も、通俗小説の読者動員の能力に期待を寄せ、大正時代が終わるころになると、婦人雑誌の原稿料は、総合雑誌の原稿料の4～5倍に高騰した²²⁾。特に『婦女界』は、流行作家を起用し創作欄の充実をはかることで、読者層の拡大に成功したと言われている²³⁾。雑誌社の看板商品であった“小説(文芸)”と当時の人気商品“銘仙”を結びつけたのも『婦女界』においては必然だった。

当時の人気小説を使って、購読者の関心を喚起する企画は規模を拡大し、翌年の昭和4年(1929)

10月発行の『婦女界』40(4)に再登場する。この企画は、前回企画と同様、産地・八王子との協力企画であった。「婦女界推奨八王子高級文芸銘仙大懸賞景品附売出し」では、昨年企画を「当時品質の優秀と、精神で文芸趣味豊かな近代味横溢の柄行に対して放たれた賛美、嘆賞の声は今尚皆様の記憶に新たなことと存じます」と振り返りつつ、改めて「八王子高級文芸銘仙」の特徴を、(1)最高級の糸と染料、(2)文芸にちなんだ芸術味溢れる柄行、(3)廉価で景品付きの3つにまとめ、他銘仙より秀でた商品と強調する。

記事中の文章や、商品写真を掲載する「八王子高級文芸銘仙の代表柄-その一・その二」が述べるとおり、この企画で売り出された銘仙40点は、「内外の名作からヒントを得て図案したもの」であった。各商品名称は、「その名作品の小標題を取ったもの」で、商品の多くが各作品のヒロインから着想を得たものであった。

記事を参照し、各商品の名称と価格、着想を得た文芸作品について一覧にまとめたのが、表6である。すべての商品が、特定の作品・特定の登場人物から着想を得ているわけではなく、「ハッピーエンド」や「恋愛情景」、「美しい主題」のように文芸に関連するキーワードを利用した商品や、「東京行進曲」や「薔薇の夢」、「ローレライ」のように、詩や歌に着想を得た商品も含む。着想のヒントとなった作品は、この企画以前、おおよそ数年前以内に発表された作品や、当時連載中であった作品であることが多い。そして、当然のことと言えば当然であるが、婦女界社発行の雑誌での連載小説が大半を占める。

誌面には、前年の企画と同様、女性モデルが銘仙を着用した写真が掲載され、「(作家名)氏作(「作品タイトル」)の(ヒロイン名)に着せてみたい〜な柄です」という解説が添えられた。表6には、各商品の基本情報のほか、商品写真の解説に登場するヒロインと柄行を表す言葉、モチーフとなった文芸作品の情報も整理した。

一見して分かる通り、柄の印象を表現する言葉は極めて簡潔で、しかも同じ表現、「上品」、「近代的」、「理知的」、「明快」等が繰り返し登場する。この簡略ともいえる表現は、購読者が企画で挙

がっている各作品に目を通しており、ストーリーやヒロインの人となりを理解している前提の上に、成立しているように思える。解説を作成した編集部では、各作品に関する基礎知識は読者に共有されているものと考えていたのだろう。

着想のヒントを与えた作品のうち、一つの作品から複数名の登場人物の名前が挙がっているものもあった。前年の企画でも登場した細田民樹の『愛人』から、志摩子(花咲く唇)、時枝(ヴォルガの船歌)、令子(海の誓い)の3名、菊池寛の『受難華』から、桂子(幸福の時計)、寿美子(美しき謎)、照子(めぐる新春)の3名、同じ菊池寛の『新珠』から、瞳(恋愛の国)、都(愛の擬戦)、爛子(言葉なき恋)の3名が登場する。いずれの作品とも、雰囲気や性格の異なる複数の女性たちが活躍する作品である。読者である女性たちの間で、魅力を感じる人物に違いがあることを見越しての選択かもしれない。

『受難華』(著・菊池寛)は大正14年(1925)3月から大正15年(1926)12月まで『婦女界』に連載された小説である。女学校時代の同級生である桂子、寿美子、照子の3名が、様々な苦難を経たのちに、幸せな結婚生活を手にする過程が描かれ、好評を博した。連載が完結した年に当時の有名女優を起用し映画化されたことから人気ぶりがうかがえる。

妻子ある男性との恋に苦しむ寿美子には、彼女の賢く勝ち気な面を表現しようとしたのか「近代的で明るい」銘仙をあてている。また、海外で亡くした婚約者との婚前交渉の経験ゆえに新たな求婚者と思いがすれ違う照子、親の決めた縁談で憧れの結婚生活を送り始めたものの夫の女性関係で失望を味わう桂子は「上品」な銘仙であった。

同じく菊池寛の『新珠』からも複数の人物が登場する。大正12年(1923)4月から大正13年(1924)10月まで『婦女界』で連載されたこの作品は、瞳、都、爛子の三姉妹の物語である。婚前の貞操を守るため、惹かれていた男性からの誘いを決然と拒んだ瞳は「理知的」、姉と同じ男性から誘いを受け、肉体関係を持った結果、母となり一人で子供を育てることを決意した都は「近代的」な銘仙である。そして、信頼できる男性と思いを通わせつつ、姉

表6 『婦女界』40 掲載「八王子高級文芸銘仙」の商品情報とそのモチーフとされた文芸作品
 (塗りつぶしは小説の登場人物をモチーフにした商品、作品★は一作品から複数登場しているもの)

	商品名	ヒロイン (模様の描写)	価格	作品名 (著者)	掲載誌	発表時期 (年/月/日)
1	超美人	静江 (上品で華やか)	13円80銭	愛の獵人 (福田正夫)	婦女界	昭4/1-昭4/12
2	めぐる新春	照子 (上品)	13円80銭	受難華 (菊池寛) ★	婦女界	大14/3-大15/12
3	空の花嫁	なし (近代的)	13円80銭	-	-	-
4	花咲く唇	志摩子 (理知的)	13円50銭	愛人 (細田民樹) ★	婦女界	大15/9-昭3/12
5	天使	可愛らしい	13円50銭	-	-	-
6	ローレライ	若きソプラノ歌手	13円50銭	ローレライの唄	-	-
7	恋愛の国	瞳 (理知的)	13円80銭	新珠 (菊池寛) ★	婦女界	大12/4-大13/10
8	美しき謎	寿美子 (近代的・明るい)	13円50銭	受難華 (菊池寛) ★	婦女界	大14/3-大15/12
9	美しき主題	(美しい情感を持つ)	13円50銭	-	-	-
10	愛の擬戦	都 (近代的)	13円50銭	新珠 (菊池寛) ★	婦女界	大12/4-大13/10
11	ジュリエット	ジュリエット	13円50銭	ロミオとジュリエット	-	-
12	甦生の処女	摩耶子 (近代的)	13円80銭	聖火 (岡田三郎)	読売新聞	大15/8/16-同12/21
13	美しき鳶	玲子 (明快)	13円50銭	不壊の白珠 (菊池寛)	大阪/東京朝日新聞	昭和4/4/26-9/6
14	東京行進曲	なし (近代的)	13円50銭	西條八十・中山晋平	-	-
15	ダンテの夢	玲子 (近代的)	13円50銭	久遠の像 (加藤武雄)	婦人之友	大11/1-大12/6
16	幸福の時計	桂子 (上品)	13円50銭	受難華 (菊池寛) ★	婦女界	大14.3-大15.12
17	椿姫	椿姫	13円50銭	椿姫 (デュマ)	-	-
18	朽ちざる命	朝子 (上品で理知的)	13円50銭	母 (鶴見祐輔)	婦人倶楽部	昭2.7-昭4.6
19	魅せられたる魂	明子 (上品)	13円50銭	地霊 (中村武羅夫)	婦女界	昭2/1-昭4/4
20	孔雀夫人	梅子 (渋味の中の新味)	13円50銭	処女 (中村武羅夫)	キング	大14/1-大14/12
21	薔薇の夢	なし (夢見る女性)	13円50銭	高島華宵抒情詩集	-	-
22	空想の海	なし (思い出に浸る)	13円	海の夫人 (イブセン)	-	-
23	序曲	なし (明快)	13円	-	-	-
24	恋愛情景	なし (幸福な恋愛情景)	13円50銭	-	-	-
25	光と影	なし (色々の美観)	13円	-	-	-
26	夢魔	ふち子 (明快)	12円50銭	地上楽園 (三上於菟吉)	サンデー毎日・新潮社	大15/7-大15/12
27	言葉なき恋	爛子 (若さと明快さ)	12円50銭	新珠 (菊池寛) ★	婦女界	大12/4-大13/10
28	新しき太陽	珠子 (輝かしさ)	12円	明眸禍 (菊池寛)	婦女界	昭3/1-昭4/10
29	街頭の麗人	お君 (可憐)	12円50銭	冷火 (久米正雄)	時事新報	大13/1-大13/6
30	逸る胸	由美子 (近代的)	12円	誰の愛 (細田源吉)	婦女界	昭4/1-昭4/12
31	絵姿	静江 (すっきり)	12円	玉を抛つ (加藤武雄)	東京朝日新聞	大13/7/20-同12/31
32	円舞曲	なし (感興を想像させる)	12円	-	-	-
33	崩るる虹	俊枝 (理知的)	12円50銭	不壊の白珠 (菊池寛)	大阪/東京朝日新聞	昭和4/4/26-9/6
34	ヴォルガの船歌	時枝 (近代的)	12円	愛人 (細田民樹) ★	婦女界	大15/9-昭3/12
35	護りの騎士	真珠夫人 (上品)	12円50銭	真珠夫人 (菊池寛)	大阪/東京朝日新聞	大9/6/9-12/22
36	愛すればこそ	静子 (近代的)	10円80銭	慈悲心鳥 (菊池寛)	母の友	大10/5-大11/6
37	またたく星	淳子 (理知的)	10円80銭	奔流 (三宅やす子)	朝日新聞	大14/1/1-大15/4/29
38	秘めたる恋	なし (不言不語の恋)	11円	-	-	-
39	海の誓ひ	令子 (上品なかに粹)	9円80銭	愛人 (細田民樹) ★	婦女界	大15/9-昭3/12
40	ハッピーエンド	なし (幸福な結末を喜ぶ)	11円	-	-	-

二人に不実な真似をした男性へ意趣返しを試みる爛子には「明るく近代的」な銘仙をあてている。

こうして整理をしても、解説文には「ヒロインの性格が柄の何処かから味わえます」（「八王子高級文芸銘仙の代表柄－その二」）と言えるほどの情報は含まれていない。各解説を読んだ読者が、自らの読書体験を手がかりに、ヒロインと自分を重ね合わせたり、小説世界中に商品を取り入れてみたりすることを期待していたのだろう。

この企画から八王子と『婦女界』の密接な関わりが続くとおもいきや、以降の『婦女界』誌面にこうした企画は見られない。さらに言えば、昭和5(1930)年10月発行の『婦女界』42(4)は、「1930年式伊勢崎高級文芸銘仙の新柄」を掲載した。ここで突然、「文芸銘仙」の名称が伊勢崎に移っている。図4を見ると、八王子の銘仙生産量は、昭和3年(1928)を境に減少の一途を辿っており、このことが「文芸銘仙」との関わりに影響を与えた可能性がある。

「1930年式伊勢崎高級文芸銘仙」では、もっとも独自色が強かった、文芸作品に銘仙を擬えることは行っておらず、百貨店・呉服店での即売会もなかった。この事態の背景は誌面からうかがえないものの、編集部と産地との関係は必ずしも固定的なものではなく、何かの事情や都合、産地の盛衰に影響を受ける流動的なものであったようだ。

7. 流行の終焉一戦前・昭和時代前期一

5で取り上げた『主婦之友』編集部と産地との共同販売企画の最後は、昭和5(1930)年10月発行の『主婦之友』14(10)における「主婦之友銘仙の大売出」であった。

この企画は、銘仙4大産地である伊勢崎、秩父、足利、八王子の銘仙200点から優れた商品50点を選び出し、全国の呉服店・百貨店で売り出す企画であった。誌面でたびたび伊勢崎と協力していた『主婦之友』が、伊勢崎以外の他産地からも協力を得て企画したものである。選出された50点のうち、各産地2点～3点ずつ、商品の着用写真をカラー図版にて掲載している。

売り出す銘仙を選出したのは、「各階級の名流婦人方」である。大臣や華族の夫人、画家や小説

家・役者等の文化人の夫人、女優や文芸家、美容家と総勢20名以上の女性たちが集まり審査を行った。「主婦之友銘仙の大売出」は、審査当日の審査員から寄せられた気に入った商品や産地についてのコメントを掲載している。

審査会に各産地の組合長も参加していたとみえ、廣橋伯爵夫人のコメント「お召風の銘仙が気に入った」に対し、秩父組合長が「銘仙のかべお召はちょっとくらいの雨にぬれても、普通のお召のように醜く縮み上がるようなことは絶対にありません」と補足説明をいれている。その他、榎田院長夫人の八王子の銘仙に対する質問「シミが付き易くありませんか」には、八王子組合長が「油ぬきがしてありますからシミは大丈夫です」と答えていた。

図4に表れているとおり、昭和5年(1930)以降、銘仙の生産量は減少している。産地ごとの生産量の推移を見ても、秩父のみわずかに増加傾向を見せるものの、足利はほぼ横ばい、隆盛を極めていた伊勢崎は急激な減少を見せている。この急激な減少は本格化した深刻な経済不況(昭和恐慌)によるものだと言われている²⁴⁾。この生産量の減衰と歩調を合わせるように、同時期から婦人雑誌における銘仙を取り上げた記事は減少していく。

昭和12(1937)年7月に日中戦争が開戦すると、かつての盛り上がりほどではないにせよ、銘仙を取り上げる記事が少し増加する。記事の内容は銘仙の転用法、つまり家の銘仙を新しく別の何かに仕立て直す方法について教授するものであった。

「古ぼけたモスや銘仙の袷を簡単な友禪染法で最新流行柄に」(『主婦之友』21(12)・昭和12(1937)年12月)や「和服用の銘仙一反で流行の婦人服と六七歳女児服の仕立て方」(同誌22(11)昭和13(1938)年11月)など、昭和10年代前半の記事では、そこまで衣類に困っている様子は感じられない。流行遅れとなった銘仙を再び着用可能にする工夫は、以前の記事でも見られた内容である。

ただし、「和服用の銘仙一反で流行の婦人服と六七歳女児服の仕立て方」と同頁に掲載された化粧品広告には、「長期聖戦下の非常時局、さすがにお化粧もスッカリ変わって参りました」、「舶来品禁止の現在の代用品として」とある。昭和

13年(1938)に「国家総動員法」が公布され、戦時体制への移行が本格的となった状況下で、しまい込んでいた古着の活用方法の需要は上がったものと思われる。

これが昭和10年代半ばに差し掛かると、誌面の言葉や表現からも戦時体制下であることが強く伝わってくるようになる。この時期は、第2次世界大戦開戦の前後にあたる。「銃後の衣服経済と銘仙洋服」(『婦人公論』24(2)・昭和14(1939)年2月)は和装と洋装について、前者は「銃後の婦人の澁瀾たる意気」を表すもの、後者は「民族の服装として美しい」と対置する。

その上で、「大切な銃後の一員として、男に負けない活動が期待される」ようになった女性にふさわしい服装は、体にあった洋装だと述べる。記事では、海外からの輸入に頼らない国産の絹を用いて衣服を整える重要性を説き、とりわけ、丈夫で安価、日本人女性に似合う銘仙を活用し洋服を作ることを奨励していた。同号掲載の「銘仙洋服の作り方」は、この主張を強化するように、銘仙を再利用した洋服の仕立て方を詳しく解説している。

昭和15(1940)年を過ぎると雑誌自体の紙質が悪化し、記事内容からも物資の欠乏が感じとれる。記事のタイトルに「更生」や「更生服」の言葉が並ぶとおり、女性たちは手持ちの洋服や着物を仕立て直した「更生服」を着用した。昭和17年(1942)4月発行の『主婦之友』26(4)の「和洋衣類の更生実験12種」は、「昔物の地味な銘仙緋を刺繍で若向に更生」、「銘仙の着物の残り布で便利な軽装帯」の二記事を掲載している。

「和洋衣類の更生実験12種」冒頭には「どんなに着古した着物でも、どんなに小さな小布でも、一つ一つが国家の大事な資源」、「医療切符を使って新しく物を買うよりも…(中略)…国を挙げての消費の節約に協力いたしましょう」と言葉が並ぶ。衣料切符制度はちょうどこの記事が掲載される少し前、同年2月1日から施行となっている。他記事を見ても、風呂敷を使って長襦袢を作る方法等、いよいよ人々の暮らしが困窮している様子がうかがえる。

太平洋戦争開戦以降、進む一方であった経済統

制によって、銘仙生産も縮小を余儀なくされた。そして、昭和17年(1942)頃から戦局のさらなる悪化に伴って、繊維品生産の維持・確保よりも、施設の軍需関連部門への転用と設備供出を優先することとなり、徹底的に整備が行われた²⁵⁾。各産地では昭和18年(1943)～19年(1944)にかけて銘仙を織るための力織機も供出の対象となり²⁶⁾、戦前に花開いた銘仙の流行は終焉を迎えた。

8. おわりに

8-1 考察のまとめ

ここまで戦前の雑誌記事における銘仙に関する記述の変遷について考察してきた。先行研究では、大正時代から昭和時代の始まりにかけての銘仙最盛期へ注目が集まりがちであったが、本研究では、その前後の期間も含め考察することで、雑誌記事における銘仙への認識の変遷を明らかにした。

雑誌の記述からは、日用・実用の着物と見なされがちであった銘仙が、次第によそ行きの着物としての商品価値を強めた様子がうかがえた。その変化に伴い、誌面上での評価軸も“丈夫さ”から“模様の美しさ”へと転化し、結果、“丈夫な”秩父銘仙からうって変わって“模様が鮮明で美しい”伊勢崎銘仙が高評価を受けることとなった。

銘仙流行の最盛期である昭和初期には、雑誌編集部と産地、そして百貨店が協力・連携し、銘仙を売り出す企画が展開された。明治時代後半から大正時代にかけての百貨店機関雑誌では、多くの取扱商品の一つとしての扱いに留まったことと比べると、銘仙が百貨店にとっての重要商品となり、その販売に注力されるようになったことがよく分かる。

その後、戦時体制の本格化によって、銘仙の流行は終焉を迎える。終焉の直前の時期には、銘仙は、その他着物や衣類とともに、古着として再利用や転用にまわす記事に登場していた。雑誌購読者の生活には、銘仙がしっかりと根付いていたのだろう。こうして見ていくと、各時代の雑誌記事が扱う銘仙の情報は幅広く、その時代の状況や需要にあわせて、様々な商品が流通していたと見て取れる。

8-2 今後の展開

婦人雑誌における銘仙は、「新中間層」を中心とした流行商品としての銘仙の姿を表すものであったと考えられる。雑誌、百貨店、略服市場、娯楽小説など、先行研究において新中間層が主に担い消費したとされる様々な事象が、その流行の背後には存在していた。

この新中間層と呼ばれる層は、一部のエリート層（上層）と、膨大な数のそれ以外の層（中・下層）で構成されていた。明治時代の終わりから大正時代にかけて、資本主義の発展に対応して中・下層に位置する層が急増し、内部の階層分化を急速に押し進めたといわれる²⁷⁾。銘仙流行の時期や流行を支えた道具立てから考えて流行の主たる担い手は、この中・下層の中間層である可能性が高い。

この点は、鷺田が指摘する、明治時代中期以降の中間層消費の進展で「略服市場」が下方に拡大し、新たな着物市場が生み出された動向とも符合する。また、小泉和子は「銘仙の階層差」のなかで、周囲の人々の銘仙への認識の違いに触れ、「一口に銘仙といっても品質に大きな違いがあったということ、それが階層とはっきりと対応していたということである」²⁸⁾と述べている。本研究で取り上げた雑誌記事の掲載内容を見ても、様々な銘仙が流通していたことは確かである。銘仙の流行を略服市場の拡大と関連づけて考察する場合、流通する商品と消費者の関わりはもう少し微細に分析していく必要があるだろう。

これまでの銘仙に関する研究は、斬新で個性的な図案や、それを作り出す生産者の技術開発に焦点をあてるが多かった。一方で、銘仙流行を享受し消費した側の詳細は、資料上の制約もあって具体的な検討が十分になされてこなかった。本研究の考察もまた、鷺田や小泉が指摘した、社会的階層と銘仙の関わりを論じるまでには至っていない。

しかし、少なくとも、百貨店や『主婦之友』『婦女界』編集部にとっての銘仙のあり方、裏を返せばそれらの利用者・購読者の日常において、銘仙がいかなる存在であったかの一端は、明らかにすることができたと考える。本研究での成果を踏ま

え銘仙の価格帯について調査を進め、銘仙消費者の社会的階層について具体的に検証することを今後の課題としたい。

表1 明治時代から戦前の昭和時代までの雑誌に掲載された銘仙に関する記事の一覧

発刊年・月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
明治37年(1904).7	織物界・26(勝島活版所)	伊勢崎銘仙・夏季織物の研究
明治38年(1905).9	染織時報・227(大日本織物協会)	(標本) 銘仙新織解
明治38年(1905).12	染織時報・230(大日本織物協会)	(標本) 伊勢崎銘仙解
明治40年(1907).6	新小説・第12年第6巻(春陽堂書店)	夏ごろも 壁糸織と結城縮と壁銘仙
明治40年(1907).12	染織時報・254(大日本織物協会)	伊勢崎銘仙
明治41年(1908).5	時好・6(5)(三越呉服店)	(口絵) 伊勢崎銘仙いろいろ
明治41年(1908).10	流行・5(10)(白木屋呉服店)	伊勢崎銘仙中かすり数種
明治42年(1909).3	流行・6(3)(白木屋呉服店)	毛織銘仙数種
明治42年(1909).5	流行・6(5)(白木屋呉服店)	秩父銘仙の新柄種
明治42年(1909).8	みつこしタイムス・7(10)(三越呉服店)	(口絵) 緋と銘仙
明治43年(1910).5	実業の日本・13(11)(実業の日本社)	我が秩父銘仙は如斯して強に応戦し販路を拡張せり
明治43年(1910).6	婦人くらぶ・3(6)(紫明社)	銘仙で拵へた子供の洋服
明治43年(1910).9	みつこしタイムス・8(10)(三越呉服店)	(口絵) 新柄縞緋と紺緋銘仙
明治43年(1910).9	染織時報・287(大日本織物協会)	(標本) 第一号 新銘仙解
明治43年(1910).9	染織時報・287(大日本織物協会)	(標本) 第二号 新銘仙解
明治43年(1910).10	流行・7(10)(白木屋呉服店)	銘仙の新柄
明治43年(1910).11	みつこしタイムス・8(12)(三越呉服店)	(口絵) 大阪三越呉服店陳列品 米澤糸織と銘仙織
明治43年(1910).12	みつこしタイムス・8(13)(三越呉服店)	(口絵) 大阪三越呉服店陳列品 秩父銘仙
明治44年(1911).2	みつこしタイムス・9(2)(三越呉服店)	(口絵) 新柄壁銘仙と袴地
明治44年(1911).2	みつこしタイムス・9(2)(三越呉服店)	(口絵) 新柄銘仙いろいろ
明治44年(1911).3	三越・1(1)(三越)	銘仙類 新柄緋銘仙
明治44年(1911).6	三越・1(4)(三越)	流行の夏物 銘仙袖類
明治44年(1911).8	三越・1(6)(三越)	袴地と銘仙白緋
明治44年(1911).9	三越・1(8)(三越)	銘仙と糸織物
明治44年(1911).9	三越・1(8)(三越)	銘仙緋揃
明治44年(1911).10	三越・1(9)(三越)	(口絵) 銘仙
明治44年(1911).12	三越・1(11)(三越)	(口絵) 新柄銘仙
明治45年(1912).1	三越・2(1)(三越)	新春のお召し物 銘仙
明治45年(1912).2	三越・2(2)(三越)	銘仙
明治45年(1912).3	三越・2(3)(三越)	銘仙
明治45年(1912).4	三越・2(4)(三越)	銘仙
明治45年(1912).5	三越・2(5)(三越)	(口絵) 銘仙
明治45年(1912).5	流行・9(5)(白木屋呉服店)	伊勢崎銘仙と秩父銘仙
明治45年(1912).7	三越・2(7)(三越)	(口絵) 銘仙
大正元年(1912).8	三越・2(8)(三越)	(口絵) 新銘仙類
大正元年(1912).8	流行・9(9)(白木屋呉服店)	銘仙の模様緋
大正元年(1912).11	三越・2(12)(三越)	新銘仙と合羽地
大正元年(1912).12	三越・2(13)(三越)	秩父銘仙
大正2年(1913).1	三越・3(1)(三越)	新春の秩父銘仙
大正2年(1913).3	三越・3(3)(三越)	新銘仙と紡績緋
大正2年(1913).3	三越・3(3)(三越)	秩父銘仙
大正2年(1913).4	三越・3(4)(三越)	秩父銘仙
大正2年(1913).5	トヤマ・92(トヤマ新聞社)	流行 平常着の銘仙類 恁なのがはやる
大正2年(1913).5	三越・3(5)(三越)	秩父銘仙
大正2年(1913).5	三越・3(5)(三越)	結城紬と銘仙
大正2年(1913).5	流行・10(6)(白木屋呉服店)	伊勢崎銘仙
大正2年(1913).6	三越・3(6)(三越)	新銘仙
大正2年(1913).6	三越・3(6)(三越)	秩父銘仙
大正2年(1913).6	流行・10(7)(白木屋呉服店)	白地伊勢崎銘仙
大正2年(1913).7	三越・3(7)(三越)	白銘仙と青梅
大正2年(1913).7	三越・3(7)(三越)	秩父銘仙
大正2年(1913).7	婦人之友・7(7)(婦人之友社)	(口絵) 秩父銘仙の新案帯地
大正2年(1913).8	三越・3(8)(三越)	銘仙と上布

発刊年・月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
大正2年(1913).9	三越・3(9)(三越)	新お召と新銘仙
大正2年(1913).9	三越・3(9)(三越)	新銘仙
大正2年(1913).10	流行・10(11)(白木屋呉服店)	節糸と銘仙
大正2年(1913).10	流行・10(11)(白木屋呉服店)	銘仙のさまざま
大正2年(1913).10	流行・10(11)(白木屋呉服店)	銘仙模様緋
大正2年(1913).12	三越・3(12)(三越)	銘仙
大正3年(1914).1	三越・4(1)(三越)	新銘仙類
大正3年(1914).1	三越・4(1)(三越)	秩父銘仙
大正3年(1914).2	三越・4(2)(三越)	(口絵)モスリン新銘仙類
大正3年(1914).2	三越・4(2)(三越)	(口絵)銘仙
大正3年(1914).3	三越・4(3)(三越)	新銘仙類
大正3年(1914).3	三越・4(3)(三越)	銘仙と米琉
大正3年(1914).4	三越・4(4)(三越)	(口絵)春向き新銘仙
大正3年(1914).4	婦人之友・8(4)(婦人之友社)	(口絵)秩父銘仙の帯側(其一)
大正3年(1914).4	流行・11(4)(白木屋呉服店)	新銘仙のいろいろ
大正3年(1914).4	流行・11(4)(白木屋呉服店)	銘仙のいろいろ
大正3年(1914).5	三越・4(5)(三越)	(口絵)新柄の銘仙単衣地
大正3年(1914).5	流行・11(5)(白木屋呉服店)	伊勢崎銘仙の新柄
大正3年(1914).6	婦人之友・8(6)(婦人之友社)	(口絵)秩父銘仙の帯側新柄
大正3年(1914).6	婦人之友・8(6)(婦人之友社)	(口絵)秩父銘仙の浴衣地
大正3年(1914).6	流行・11(6)(白木屋呉服店)	白銘仙の粹
大正3年(1914).6	流行・11(6)(白木屋呉服店)	銘仙の紺緋
大正3年(1914).8	三越・4(8)(三越)	(口絵)中形新銘仙
大正3年(1914).8	三越・4(8)(三越)	新お召と新銘仙
大正3年(1914).9	三越・4(9)(三越)	(口絵)銘仙
大正3年(1914).9	婦人之友・8(9)(婦人之友社)	(口絵)秩父銘仙はこうして出来る
大正3年(1914).10	三越・4(10)(三越)	(口絵)伊勢崎銘仙
大正3年(1914).10	三越・4(10)(三越)	(口絵)新柄銘仙
大正3年(1914).10	流行・11(10)(白木屋呉服店)	銘仙珍柄
大正3年(1914).11	流行・11(11)(白木屋呉服店)	秩父銘仙
大正3年(1914).12	流行・11(12)(白木屋呉服店)	銘仙の大島緋
大正4年(1915).2	流行・12(2)(白木屋呉服店)	米琉と銘仙の新柄
大正4年(1915).5	流行・12(5)(白木屋呉服店)	伊勢崎銘仙の単衣地
大正4年(1915).9	三越・5(9)(三越)	新銘仙
大正4年(1915).9	三越・5(9)(三越)	銘仙類
大正4年(1915).10	三越・5(10)(三越)	糸入瓦斯と新銘仙
大正4年(1915).10	流行・12(10)(白木屋呉服店)	緋銘仙
大正4年(1915).10	流行・12(10)(白木屋呉服店)	縞銘仙
大正4年(1915).11	三越・5(11)(三越)	銘仙
大正4年(1915).11	流行・12(11)(白木屋呉服店)	新銘仙の珍柄
大正4年(1915).12	三越・5(12)(三越)	銘仙
大正4年(1915).12	流行・12(12)(白木屋呉服店)	新銘仙の粹
大正4年(1915).12	流行・12(12)(白木屋呉服店)	銘仙の珍柄
大正5年(1916).3	東西織物界・第9年(99)(東西織物界社)	流行の銘仙は
大正5年(1916).3	流行・13(3)(白木屋呉服店)	新銘仙緋に新節糸縞
大正5年(1916).3	流行・13(3)(白木屋呉服店)	米琉と銘仙
大正5年(1916).4	婦人雑誌・5(4)(婦人雑誌社)	私は銘仙党です
大正5年(1916).4	流行・13(4)(白木屋呉服店)	銘仙の珍柄
大正5年(1916).5	三越・6(5)(三越)	銘仙
大正5年(1916).5	流行・13(5)(白木屋呉服店)	伊勢崎銘仙紺緋
大正5年(1916).6	三越・6(6)(三越)	銘仙
大正5年(1916).6	婦人之友・10(6)(婦人之友社)	写真版 秩父銘仙の洋服
大正5年(1916).6	流行・13(6)(白木屋呉服店)	伊勢崎銘仙
大正5年(1916).7	流行・13(7)(白木屋呉服店)	白地銘仙
大正5年(1916).8	三越・6(8)(三越)	上布と銘仙

発刊年・月	雑誌名・巻号（発行元）	記事名
大正5年(1916).9	三越・6(9)(三越)	新銘仙
大正5年(1916).9	三越・6(9)(三越)	秩父銘仙
大正5年(1916).10	三越・6(10)(三越)	新柄の新銘仙
大正5年(1916).10	三越・6(10)(三越)	流行の秩父銘仙その他 新柄の伊勢崎銘仙
大正5年(1916).10	染織時報・360(大日本織物協会)	本場秩父伊勢崎銘仙新柄競技会を観る
大正5年(1916).10	流行・13(10)(白木屋呉服店)	懸賞謡曲模様応用の銘仙
大正5年(1916).11	流行・13(11)(白木屋呉服店)	新銘仙模様緋
大正5年(1916).11	流行・13(11)(白木屋呉服店)	新銘仙珍柄
大正5年(1916).11	流行・13(11)(白木屋呉服店)	緋銘仙の珍柄
大正5年(1916).11	流行・13(11)(白木屋呉服店)	縞銘仙の珍柄
大正5年(1916).12	流行・13(12)(白木屋呉服店)	新柄銘仙
大正6年(1917).1	三越・7(1)(三越)	流行の本秩父銘仙その他
大正6年(1917).1	染織時報・363(大日本織物協会)	染織経済 大正五年の伊勢崎銘仙
大正6年(1917).1	染織時報・363(大日本織物協会)	伊勢崎銘仙と自覚
大正6年(1917).2	婦人週報・3(6)(婦人週報社)	織物研究 銘仙の見分け方
大正6年(1917).2	流行・14(2)(白木屋呉服店)	銘仙の新柄
大正6年(1917).3	流行・14(3)(白木屋呉服店)	新柄絞り銘仙
大正6年(1917).3	流行・14(3)(白木屋呉服店)	銘仙緋
大正6年(1917).5	三越・7(5)(三越)	流行の新銘仙
大正6年(1917).5	流行・14(5)(白木屋呉服店)	銘仙単衣地
大正6年(1917).6	流行・14(6)(白木屋呉服店)	大柄の夏銘仙
大正6年(1917).6	流行・14(6)(白木屋呉服店)	銘仙片側帯
大正6年(1917).7	流行・14(7)(白木屋呉服店)	銘仙の白緋
大正6年(1917).7	流行・14(7)(白木屋呉服店)	銘仙織模様の新柄
大正6年(1917).11	流行・14(11)(白木屋呉服店)	新大島銘仙緋
大正6年(1917).11	流行・14(11)(白木屋呉服店)	新銘仙大緋の新柄
大正6年(1917).11	流行・14(11)(白木屋呉服店)	秩父銘仙の新柄
大正6年(1917).11	流行・14(11)(白木屋呉服店)	銘仙緋の新柄
大正6年(1917).12	三越・7(12)(三越)	春向き銘仙しなじな
大正6年(1917).12	流行・14(12)(白木屋呉服店)	模様新銘仙
大正6年(1917).12	流行・14(12)(白木屋呉服店)	模様銘仙新柄
大正6年(1917).12	流行・14(12)(白木屋呉服店)	銘仙新柄
大正7年(1918).1	三越・8(1)(三越)	大柄銘仙夜具地
大正7年(1918).3	染織時報・377(大日本織物協会)	染織経済 大正六年伊勢崎銘仙額表
大正7年(1918).3	白木タイムス・15(3)(白木屋呉服店)	毛織銘仙
大正7年(1918).3	白木タイムス・15(3)(白木屋呉服店)	銘仙緋
大正7年(1918).4	白木タイムス・15(4)(白木屋呉服店)	新銘仙
大正7年(1918).9	三越・8(9)(三越)	大柄の銘仙
大正7年(1918).9	三越・8(9)(三越)	新柄の縞銘仙
大正7年(1918).9	三越・8(9)(三越)	華陽銘仙緋
大正7年(1918).9	東西織物界・第11年(129)(東西織物界社)	梅の無地銘仙
大正7年(1918).10	白木タイムス・15(10)(白木屋呉服店)	銘仙新柄
大正7年(1918).11	白木タイムス・15(11)(白木屋呉服店)	模様銘仙と絞銘仙
大正7年(1918).11	白木タイムス・15(11)(白木屋呉服店)	銘仙小緋
大正7年(1918).12	白木タイムス・15(12)(白木屋呉服店)	新銘仙新柄
大正8年(1919).2	白木タイムス・16(2)(白木屋呉服店)	縞銘仙
大正8年(1919).3	白木タイムス・16(3)(白木屋呉服店)	緋銘仙
大正8年(1919).4	白木タイムス・16(4)(白木屋呉服店)	毛織銘仙
大正8年(1919).4	白木タイムス・16(4)(白木屋呉服店)	縞銘仙
大正8年(1919).5	白木タイムス・16(5)(白木屋呉服店)	夏向銘仙
大正8年(1919).6	白木タイムス・16(6)(白木屋呉服店)	白地銘仙
大正8年(1919).11	三越・9(11)(三越)	(口絵) 新柄の銘仙
大正9年(1920).10	三越・10(10)(三越)	銘仙と米菴
大正10年(1921).1	婦人之友・15(1)(婦人之友社)	旧思想旧習慣に打勝ち得た愉快 銘仙主義の勝利と一汁一菜主義

発刊年・月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
大正10年(1921).6	三越・11(6)(三越)	新柄の銘仙
大正10年(1921).6	主婦之友・5(6)(主婦之友社)	家庭でできる銘仙やモスリンの洗い張りの仕方
大正10年(1921).7	東西織物界・14(7月乃巻)(東西織物界社)	秋冬物銘仙の流行色
大正10年(1921).7	東西織物界・14(7月乃巻)(東西織物界社)	銘仙に代るべき新らしき物が欲しい
大正12年(1923).2	東西織物界・16(如月巻)(東西織物界社)	成績よかつた伊勢崎銘仙
大正12年(1923).3	東西織物界・16(弥生巻)(東西織物界社)	万人向きの伊勢崎銘仙の權威
大正12年(1923).3	東西織物界・16(弥生巻)(東西織物界社)	古い名の秩父銘仙
大正12年(1923).4	東西織物界・16(卯月巻)(東西織物界社)	伊勢崎銘仙審評
大正12年(1923).4	東西織物界・16(卯月巻)(東西織物界社)	銘仙新柄陳列会御禮に換へて
大正12年(1923).6	東西織物界・16(水無月巻)(東西織物界社)	旗色を鮮明にして打つて出た桐生銘仙の評
大正13年(1924).1	太陽・30(1)(博文館)	家庭経済の常識(其一) 伊勢崎銘仙の品質と特色
大正13年(1924).2	主婦之友・8(2)(主婦之友社)	秩父銘仙の機場を視る記
大正13年(1924).4	東西織物界・17(188-193)(東西織物界社)	大阪店第二回銘仙新柄陳列会評
大正13年(1924).9	染色界之好侶伴商報・443(柴田商店)	秋冬向伊勢崎銘仙競技会
大正13年(1924).12	染色界之好侶伴商報・446(柴田商店)	伊勢崎市場で取引されるのは純粹の伊勢崎銘仙のみ
大正14年(1925).1	染色界之好侶伴商報・447(柴田商店)	伊勢崎銘仙の額
大正14年(1925).1	染色界之好侶伴商報・447(柴田商店)	伊勢崎銘仙の發展
大正14年(1925).3	染色界之好侶伴商報・449(柴田商店)	伊勢崎銘仙競技会
大正14年(1925).5	染色界之好侶伴商報・463(柴田商店)	春向銘仙
大正14年(1925).6	染色界之好侶伴商報・452(柴田商店)	重ねて優賞の伊勢崎銘仙
大正14年(1925).8	染色界之好侶伴商報・454(柴田商店)	秋冬向伊勢崎銘仙競技会
大正14年(1925).8	染色界之好侶伴商報・454(柴田商店)	秋冬向伊勢崎銘仙競技会受賞者
大正14年(1925).9	愛の泉・9月号(愛の泉社)	銘仙の洗濯と伸子張りの仕方
大正14年(1925).9	婦人之友・19(9)(婦人之友社)	浴衣地銘仙メリンスの洋服製作品当選發表
大正14年(1925).10	婦女界・32(4)(婦女界出版社)	(口絵) 今秋の流行色と銘仙の新柄
大正14年(1925).10	婦女界・32(4)(婦女界出版社)	今秋の流行色と銘仙の新柄
大正14年(1925).11	染色界之好侶伴商報・469(柴田商店)	秩父銘仙の模様物へ
大正15年(1926).1	上毛及上毛人・105(上毛郷土史研究会)	伊勢崎銘仙の通信販売に就て
大正15年(1926).3	上毛及上毛人・107(上毛郷土史研究会)	伊勢崎銘仙の通信販売
大正15年(1926).4	主婦之友・10(4)(主婦之友社)	銘仙程度の春の流行界
大正15年(1926).6	主要貨物情報・2(6)(鉄道省運輸局)	本場秩父銘仙
大正15年(1926).9	婦女界・34(3)(婦女界出版社)	秋のおとづれ(色刷) 加納川郁之助
大正15年(1926).9	婦女界・34(3)(婦女界出版社)	初裕用の新柄銘仙
大正15年(1926).12	婦人倶楽部・7(12)(講談社)	愛される乙女のタイプお下げに結つた銘仙の少女
昭和2年(1927).2	婦女界・35(2)(婦女界出版社)	お召や銘仙の見分け方
昭和2年(1927).3	染色界之好侶伴商報・473(柴田商店)	今春の銘仙柄
昭和2年(1927).4	主婦之友・11(4)(主婦之友社)	銘仙と春の流行
昭和2年(1927).4	染色界之好侶伴商報・474(柴田商店)	伊勢崎銘仙競技会
昭和2年(1927).4	主婦之友・11(4)(主婦之友社)	(口絵) 新しい流行の銘仙
昭和2年(1927).8	婦女界・36(2)(婦女界出版社)	銘仙メリンス等の夜具蒲団の洗濯法
昭和2年(1927).9	婦女界・36(3)(婦女界出版社)	(口絵と写真) 秋の流行色と銘仙の新柄
昭和2年(1927).9	婦女界・36(3)(婦女界出版社)	銘仙の種類と産地
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	主婦之友が作った今秋流行伊勢崎銘仙
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	(口絵) 今秋流行銘仙-岡田嘉子さん
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	(口絵) 今秋流行銘仙-水谷八重子さん
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	(口絵) 今秋流行銘仙-村田嘉久子さん
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	(口絵) 今秋流行銘仙-栗島すみ子さん
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	(口絵) 今秋流行銘仙-松井千枝子さん
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	(口絵) 今秋流行銘仙-森律子さん
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	(口絵) 今秋流行銘仙-小櫻葉子さん
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	銘仙の出来上るまで
昭和2年(1927).10	主婦之友・11(10)(主婦之友社)	主婦之友伊勢崎銘仙 -反毎に附する総額一万五千円の大景品
昭和2年(1927).11	主婦之友・11(11)(主婦之友社)	飾人形と地下鐵堂道
昭和2年(1927).11	東西織物界・20(330・236)(東西織物界社)	銘仙菊の会

発刊年・月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
昭和3年(1928).1	染色界之好侶伴商報・483(柴田商店)	銘仙の起源と沿革(一)
昭和2年(1927).11	主婦之友・11(11)(主婦之友社)	主婦之友銘仙展
昭和3年(1928).2	主婦之友・12(2)(主婦之友社)	主婦之友伊勢崎銘仙大景品当籤者発表
昭和3年(1928).2	婦女界・37(2)(婦女界出版社)	今春流行の新柄銘仙―色刷
昭和3年(1928).2	婦女界・37(2)(婦女界出版社)	(口絵)春の装い
昭和3年(1928).2	婦女界・37(2)(婦女界出版社)	図案に新機軸を見せた春の銘仙
昭和3年(1928).2	婦人公論・13(2)(中央公論社)	流行批判 絞り銘仙の変化
昭和3年(1928).2	婦人之友・22(2)(婦人之友社)	古銘仙を染めて外出着
昭和3年(1928).6	文化生活・6(6)(文化普及会)	家庭経済知識 本年春向き銘仙
昭和3年(1928).9	主婦之友・12(9)(主婦之友社)	流行銘仙の魅―主婦之友伊勢崎銘仙 瑞祥・和田三造先生考案
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	一万五千円の大景品附 主婦之友伊勢崎銘
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	全国一流呉服店に於て開催する『主婦之友』伊勢崎銘仙即売展覧
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(グラビア)秋の流行を代表する主婦之友伊勢崎銘仙 一
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(グラビア)秋の流行を代表する主婦之友伊勢崎銘仙 二
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(グラビア)秋の流行を代表する主婦之友伊勢崎銘仙 三
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(グラビア)秋の流行を代表する主婦之友伊勢崎銘仙 四
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―あじさい・入江たか子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―野路・梅村蓉子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―ざくろと雲の柱・巴玲子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―うろこ小紋と芽やなぎ・河村菊江さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―豊穰・塚光代さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―霞八丈・鶴間薫枝さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―花びしと格子がすり・森律子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―にしき葉・小林延子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―ベルシャ模様とみやび・石井小波さん 五節しほり・崔承喜さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―天平のおもかげとらんたつ・東日出子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―九重・絲子さん 慶満草・安子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―瑞祥・水谷八重子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―しま市松・栗島澄子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―かがやき・小櫻葉子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―小草絞りと慶び草・梅村蓉子さん 月光・夏川静江さん 若き日と夕ばえ・入江たか子さん
昭和3年(1928).10	主婦之友・12(10)(主婦之友社)	(口絵)流行銘仙くらべ―矢羽根くずし・村田竹子さん
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(口絵)三小説のヒロイン
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(口絵)八王子の文芸銘仙―色刷
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(口絵)文芸銘仙の出来る迄
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(口絵)文芸銘仙の新装
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(口絵)御大典に因んだ瑞雲
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(口絵)文芸銘仙の賞品
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(口絵)秩父銘仙やよび模様―色刷
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(グラビア)文芸銘仙と近代婦人姿―その一
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(グラビア)文芸銘仙と近代婦人姿―その二
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(グラビア)文芸銘仙と近代婦人姿―その三
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(グラビア)文芸銘仙と近代婦人姿―その四
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(グラビア)文芸銘仙と近代婦人姿―その五
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(グラビア)文芸銘仙と近代婦人姿―その六
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(グラビア)文芸銘仙と近代婦人姿―その七
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	(グラビア)文芸銘仙と近代婦人姿―その八
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	今秋の流行を代表する文芸銘仙

発刊年・月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	八王子文芸銘仙の出来るまで
昭和3年(1928).10	婦女界・38(4)(婦女界出版社)	婦女界社推奨大懸賞景品附売出し 八王子高級文芸銘仙
昭和3年(1928).11	主婦之友・12(11)(主婦之友社)	売り切れぬうち!! 機止めにならぬうち!! 主婦之友伊勢崎銘仙を
昭和3年(1928).11	主婦之友・12(11)(主婦之友社)	今年の流行を代表する評判の主婦之友伊勢崎銘仙 考案された方と召された方のご感想
昭和3年(1928).11	婦女界・38(5)(婦女界出版社)	(口絵) 宝銘仙とベリ-ナイス
昭和3年(1928).11	婦女界・38(5)(婦女界出版社)	(口絵) 宝銘仙の日常着-色刷
昭和4年(1929).2	主婦之友・13(2)(主婦之友社)	主婦之友伊勢崎銘仙大景品当籤者発表
昭和4年(1929).2	婦女界・39(2)(婦女界出版社)	(口絵) 春向の銘仙-色刷
昭和4年(1929).2	婦女界・39(2)(婦女界出版社)	銘仙に現はれる新傾向
昭和4年(1929).2	婦女界・39(2)(婦女界出版社)	(グラビア) 春向銘仙の逸品
昭和4年(1929).3	帝国工芸・3(3)(帝国工芸会)	伊勢崎銘仙と来る可き流行
昭和4年(1929).4	染織之流行・11(4)(菱山相互会)	新アラバスク-本銘仙会員製
昭和4年(1929).4	染織之流行・11(4)(菱山相互会)	新アラバスク-本銘仙会員製
昭和4年(1929).4	染織之流行・11(4)(菱山相互会)	銘仙販売の合理化
昭和4年(1929).5	全関西婦人連合会・6(5)(全関西婦人連合会)	流行銘仙
昭和4年(1929).7	染織之流行・11(7)(菱山相互会)	銘仙生の合理化
昭和4年(1929).9	染織之流行・11(9)(菱山相互会)	秩父銘仙と新柄
昭和4年(1929).9	染織之流行・11(9)(菱山相互会)	銘仙地の製品評
昭和4年(1929).10	三越・19(10)(三越)	三越特製 秋の新柄銘仙
昭和4年(1929).10	染織之流行・11(10)(菱山相互会)	銘仙地に就て
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	主婦之友伊勢崎銘仙即売展覧会開催店
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	銘仙についての座談会
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	(口絵) 代表的な銘仙の流行柄-昭和の令嬢姿
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	(口絵) 主婦之友銘仙-私の好きな姿-水谷八重子
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	(口絵) 主婦之友銘仙-15歳前後の乙女柄-高尾光子
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	(口絵) 主婦之友銘仙-嫁入り前のお嬢様柄-八雲恵美子・筑波雪子
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	(口絵) 主婦之友銘仙-羽織姿の若奥様柄-澤蘭子・八雲恵美子・筑波雪子
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	(口絵) 主婦之友銘仙-25歳前後の若奥様柄-栗島すみ子
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	(口絵) 主婦之友銘仙-20歳前後の明るい感じのお嬢様柄-龍花久子・夏川静江
昭和4年(1929).10	主婦之友・13(10)(主婦之友社)	(口絵) 主婦之友銘仙-品の良いモダンな令嬢柄-澤蘭子
昭和4年(1929).10	婦女界・40(4)(婦女界出版社)	(口絵) 八王子高級文芸銘仙の代表柄-その一
昭和4年(1929).10	婦女界・40(4)(婦女界出版社)	(口絵) 八王子高級文芸銘仙の代表柄-その二
昭和4年(1929).10	婦女界・40(4)(婦女界出版社)	(グラビア) 問題の麗美優銘仙
昭和4年(1929).10	婦女界・40(4)(婦女界出版社)	呉服常識 緊縮時代には銘仙を着ませう!
昭和4年(1929).11	婦女界・40(4)(婦女界出版社)	婦女界推奨八王子高級文芸銘仙大懸賞景品附売出し
昭和4年(1929).11	婦女界・40(4)(婦女界出版社)	名作から暗示を得た八王子高級文芸銘仙
昭和4年(1929).11	ビジネス・2(11)(東京時事通信社)	銘仙の流行時代
昭和4年(1929).11	染織之流行・11(11)(菱山相互会)	銘仙程度常用決議
昭和4年(1929).12	婦女界・40(5)(婦女界出版社)	(グラビア) 大評判の文芸銘仙
昭和4年(1929).12	婦女界・40(5)(婦女界出版社)	(口絵) 流行ファンを熱狂させた麗美優銘仙-その一
昭和4年(1929).12	婦女界・40(5)(婦女界出版社)	(口絵) 流行ファンを熱狂させた麗美優銘仙-その二
昭和4年(1929).11	婦人公論・14(11)(中央公論社)	清新な柄行と色彩 婦人公論好み銘仙
昭和4年(1929).12	染織之流行・11(12)(菱山相互会)	春物の銘仙生
昭和4年(1929).12	婦人公論・14(12)(中央公論社)	現代的な図案と色彩 婦人公論好み銘仙
昭和5年(1930).1	実業の日本・33(2)(実業之日本社)	『銘仙売出を繞る』三越・松坂屋宣伝戦
昭和5年(1930).1	染織之流行・12(1)(菱山相互会)	銘仙連盟の成立
昭和5年(1930).1	婦人公論・15(1)(中央公論社)	婦人公論好み銘仙
昭和5年(1930).2	主婦之友・14(2)(主婦之友社)	主婦之友伊勢崎銘仙大景品当籤者発表

発刊年・月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
昭和5年(1930).2	週刊東洋経済新報・1387(東洋経済新報社)	財界要報 銘仙連盟の成立
昭和5年(1930).4	三越・20(4)(三越)	三越特製 新柄銘仙
昭和5年(1930).4	染織時報・520(大日本織物協会)	(彙報) 全国銘仙連盟会創立總會
昭和5年(1930).4	染織之流行・12(4)(菱山相互会)	全国銘仙連盟成立
昭和5年(1930).5	染織之流行・12(5)(菱山相互会)	銘仙連盟總會
昭和5年(1930).6	染織之流行・12(6)(菱山相互会)	銘仙連盟と繁榮策
昭和5年(1930).6	紡織界・21(6)(249)(紡織雑誌社)	第122号 ダイヤ銘仙-帝国人絹岩国工場試織品
昭和5年(1930).7	上毛及上毛人・159(上毛郷土史研究会)	織物組合の銘仙陳列
昭和5年(1930).7	染織時報・523(大日本織物協会)	(統計) 銘仙連盟会五月中額
昭和5年(1930).7	染織之流行・12(7)(菱山相互会)	銘仙の將來を語る
昭和5年(1930).7	紡織界・21(7)(250)(紡織雑誌社)	第123号 春向銘仙-見本選択及び解説
昭和5年(1930).7	連合婦人・15(東京連合婦人会)	伊勢崎銘仙の話
昭和5年(1930).8	染織時報・524(大日本織物協会)	(統計) 七月中銘仙連盟組合生額
昭和5年(1930).9	三越・20(9)(三越)	三越特製 地変わり銘仙
昭和5年(1930).9	染織之流行・12(9)(菱山相互会)	銘仙の將來に就て
昭和5年(1930).10	主婦之友・14(10)(主婦之友社)	四大産地の流行銘仙
昭和5年(1930).10	染織之流行・12(10)(菱山相互会)	御召銘仙縮に就て
昭和5年(1930).10	主婦之友・14(10)(主婦之友社)	主婦之友本銘仙
昭和5年(1930).10	主婦之友・14(10)(主婦之友社)	四大産地の逸品をすぐり抜いた主婦之友本銘仙の大売出
昭和5年(1930).10	婦女界・42(4)(婦女界出版社)	(口絵) 一九三〇年式伊勢崎高級文芸銘仙の新柄-その一
昭和5年(1930).10	婦女界・42(4)(婦女界出版社)	(口絵) 一九三〇年式伊勢崎高級文芸銘仙の新柄-その二
昭和5年(1930).10	婦人公論・15(10)(中央公論社)	(口絵) 男鹿の秋 色秋の銘仙「花を捧げる」これがみんな揃つたら 秋を訪ねて
昭和5年(1930).11	染織之流行・12(11)(菱山相互会)	伊勢崎足利銘仙市
昭和5年(1930).11	婦人公論・15(11)(中央公論社)	特選 婦人公論銘仙
昭和5年(1930).11	婦人公論・15(11)(中央公論社)	秋の銘仙 344
昭和5年(1930).12	染織之流行・12(12)(菱山相互会)	銘仙六大地批評
昭和6年(1931).1	染織之流行・13(1)(菱山相互会)	春物銘仙に就て
昭和6年(1931).1	染織之流行・13(1)(菱山相互会)	流行の模様銘仙
昭和6年(1931).3	染織之流行・13(3)(菱山相互会)	五大地銘仙批評
昭和6年(1931).3	染織之流行・13(3)(菱山相互会)	本会の銘仙の感想
昭和6年(1931).3	染織之流行・13(3)(菱山相互会)	銘仙明石の芸術化
昭和6年(1931).4	京都経済時報・第1巻第12号(京都商工会議所)	地方情報 昭和五年中銘仙地別生額
昭和6年(1931).4	三越・21(4)(三越)	三越特製 お召風銘仙
昭和6年(1931).4	染織之流行・13(4)(菱山相互会)	伊勢崎銘仙に就て
昭和6年(1931).4	染織之流行・13(4)(菱山相互会)	春物銘仙新標本-三越服部選品
昭和6年(1931).4	染織之流行・13(4)(菱山相互会)	銘仙市値絹紡繰短
昭和6年(1931).4	東洋経済新報経済年鑑・15(東洋経済新報社)	商品相場 東京市内卸売物価表(東洋経済調) 織物及同原料品(銘仙)
昭和6年(1931).5	上毛及上毛人・169(上毛郷土史研究会)	銘仙に就て
昭和6年(1931).6	染織之流行・13(6)(菱山相互会)	新芸術派調銘仙
昭和6年(1931).6	染織之流行・13(6)(菱山相互会)	秋物銘仙の前途
昭和6年(1931).7	染織之流行・13(7)(菱山相互会)	秋物の銘仙と意匠
昭和6年(1931).8	染織之流行・13(8)(菱山相互会)	銘仙連盟に就て
昭和6年(1931).8	婦女界・44(2)(婦女界出版社)	上等銘仙夜具地の特価提供
昭和6年(1931).8	婦女界・44(2)(婦女界出版社)	(口絵) 銘仙夜具地の特価提供
昭和6年(1931).9	郷土研究・5(4)(郷土研究社)	銘仙の語義
昭和6年(1931).9	財務協会雑誌・15(9)(東京財務協会)	足利本銘仙とセーミ加工の応用
昭和6年(1931).11	染織之流行・13(11)(菱山相互会)	銘仙の新意匠
昭和7年(1932).2	染織之流行・14(2)(菱山相互会)	秩父銘仙と意匠
昭和7年(1932).3	染織之流行・14(3)(菱山相互会)	銘仙地に訴ふ
昭和7年(1932).3	地理と歴史・4(3)(正光社出版部)	秩父銘仙について
昭和7年(1932).4	染織之流行・14(4)(菱山相互会)	芸術家の見た銘仙

発刊年. 月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
昭和7年(1932).4	染織之流行・14(4)(菱山相互会)	銘仙に人絹の交織
昭和7年(1932).5	染織之流行・14(5)(菱山相互会)	芸術銘仙と明石
昭和7年(1932).5	染織之流行・14(5)(菱山相互会)	菱山推奨秩父銘仙
昭和7年(1932).5	染織之流行・14(5)(菱山相互会)	銘仙大会品質本位
昭和7年(1932).7	染織之流行・14(7)(菱山相互会)	秋の銘仙の地風
昭和7年(1932).7	染織之流行・14(7)(菱山相互会)	銘仙意匠と京物
昭和7年(1932).8	染織之流行・14(8)(菱山相互会)	銘仙意匠の芸術化
昭和7年(1932).10	婦女界・46(4)(婦女界出版社)	(口絵)秋の新柄銘仙
昭和7年(1932).10	婦女界・46(4)(婦女界出版社)	秋の流行界だより 上手なお買い物案内-スポーツ銘仙
昭和7年(1932).11	染織之流行・14(11)(菱山相互会)	芸調派銘仙新機運
昭和7年(1932).11	婦女界・46(5)(婦女界出版社)	初冬の流行界だより-鐘紡銘仙
昭和7年(1932).11	協和・85(満鐵員会)	秩父銘仙の出来るまで
昭和7年(1932).12	染織之流行・14(12)(菱山相互会)	春物銘仙と新意匠
昭和8年(1933).4	週刊東洋経済新報・1543(東洋経済新報社)	地方産業事情を尋ねる移動座談会(一) 銘仙産地伊勢崎の現況を聴く
昭和8年(1933).4	染織之流行・15(4)(菱山相互会)	新芸術派調と銘仙
昭和8年(1933).4	染織之流行・15(4)(菱山相互会)	新芸術派調と銘仙
昭和8年(1933).4	染織之流行・15(4)(菱山相互会)	芸調風光派と銘仙
昭和8年(1933).4	東洋経済新報経済年鑑・17(東洋経済新報社)	商品生及集散(織物) 銘仙及スパンクレア生高
昭和8年(1933).5	染織之流行・15(5)(菱山相互会)	人絹銘仙に就て
昭和8年(1933).5	婦女界・47(5)(婦女界出版社)	初夏の流行界だより-銘仙の最新柄
昭和8年(1933).6	染織之流行・15(6)(菱山相互会)	夏の銘仙特選標本-松屋服部選品
昭和8年(1933).6	染織之流行・15(6)(菱山相互会)	新秋主張銘仙大会
昭和8年(1933).8	染織之流行・15(8)(菱山相互会)	秋景気と銘仙考案
昭和8年(1933).8	ダイヤモンド・21(24)(ダイヤモンド社)	本場銘仙の産地秩父機業を見る
昭和8年(1933).10	染織之流行・15(10)(菱山相互会)	銘仙百選会標本
昭和8年(1933).12	染織之流行・15(12)(菱山相互会)	銘仙地風改善急務
昭和9年(1934).1	染織之流行・16(1)(菱山相互会)	銘仙地危急救ふ
昭和9年(1934).2	染織時報・566(大日本織物協会)	(統計)昭和八年中銘仙額
昭和9年(1934).4	染織之流行・16(4)(菱山相互会)	国風新草花調銘仙
昭和9年(1934).5	東洋経済新報経済年鑑・18(東洋経済新報社)	商品生及集散(織物) 銘仙及スパンクレア生高
昭和9年(1934).6	染織之流行・16(6)(菱山相互会)	銘仙は装飾に有望
昭和9年(1934).6	風俗研究・169(風俗研究会)	銘仙の語源と沿革
昭和9年(1934).7	染織時報・571(大日本織物協会)	(統計)昭和九年上半年期全国銘仙額
昭和9年(1934).7	染織之流行・16(7)(菱山相互会)	秋冬物銘仙振興策
昭和9年(1934).7	染織之流行・16(7)(菱山相互会)	銘仙消費進策
昭和9年(1934).8	蚕糸経済・第6巻59号(横浜合同通信社)	上半期の銘仙
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	(表紙)冬物銘仙の新意匠
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	優良銘仙大博覧会
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙と婦人優越性
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙のレベル向上
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙の名稱を保存
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙は反仕立時代
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙は本絹 質帰れ
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙分業の新統制
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙地と製品評
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙地の新施設
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	銘仙地返品問題
昭和9年(1934).8	染織之流行・16(8)(菱山相互会)	(表紙)冬物銘仙の新意匠
昭和9年(1934).9	染織之流行・16(9)(菱山相互会)	創作優良銘仙大博覧会出品好評柄
昭和9年(1934).9	染織之流行・16(9)(菱山相互会)	銘仙博覧会遊会
昭和9年(1934).9	染織之流行・16(9)(菱山相互会)	銘仙織着尺の本質
昭和9年(1934).10	染織之流行・16(10)(菱山相互会)	再び銘仙の受取引を論ず
昭和9年(1934).10	染織之流行・16(10)(菱山相互会)	銘仙の意匠
昭和9年(1934).11	染織之流行・16(11)(菱山相互会)	明春も優良銘仙本位に進まれたし

発刊年・月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
昭和9年(1934).11	染織之流行・16(11)(菱山相互会)	春銘仙についての一考察
昭和9年(1934).12	染織之流行・16(12)(菱山相互会)	銘仙界の三大工作
昭和10年(1935).1	染織之流行・17(1)(菱山相互会)	銘仙一千疋の販売
昭和10年(1935).1	日本百貨店組合調査彙報・3(1)(日本百貨店組合)	昭和九年中銘仙生数量
昭和10年(1935).2	染織時報・578(大日本織物協会)	(統計)昭和九年銘仙連盟加入組合額
昭和10年(1935).2	染織之流行・17(2)(菱山相互会)	銘仙生の要望
昭和10年(1935).3	帝人タイムス・10(3)(帝人社)	人絹応用銘仙の織物の前途
昭和10年(1935).5	東洋経済新報経済年鑑・19(東洋経済新報社)	商品生及集散(織物)絹銘仙及スパンクレア生高
昭和10年(1935).5	東洋経済新報経済年鑑・19(東洋経済新報社)	商品相場(物価指数)織物及同原料品 銘仙
昭和10年(1935).6	染織之流行・17(6)(菱山相互会)	秋の銘仙に就いて
昭和10年(1935).6	染織之流行・17(6)(菱山相互会)	銘仙レイヨン応用
昭和10年(1935).7	染織時報・583(大日本織物協会)	染織時言 銘仙が人気を落した原因と聲値回復策
昭和10年(1935).7	染織之流行・17(7)(菱山相互会)	銘仙究座談会
昭和10年(1935).8	蚕糸経済・第7巻71号(横浜合同通信社)	上半期全国銘仙
昭和10年(1935).8	染織之流行・17(8)(菱山相互会)	銘仙の四改善策
昭和10年(1935).8	染織之流行・17(8)(菱山相互会)	銘仙は製品の改良
昭和10年(1935).9	生活と趣味・2(4)秋の巻(生活と趣味之会)	銘仙界の寵児川秩父銘仙
昭和10年(1935).10	日本百貨店組合調査彙報・3(10)(日本百貨店組合)	特許の容の解釈と業の進展 -銘仙連盟の上特許に対する抗争
昭和10年(1935).11	化学工芸・19(11)(化学工芸社)	(講義資料)伊勢崎銘仙の染色に就て
昭和10年(1935).11	染織之流行・17(11)(菱山相互会)	銘仙繞る新問題
昭和10年(1935).11	紡織界・26(11)(317)(紡織雑誌社)	ドビー応用・模様銘仙製造法実物解説
昭和10年(1935).12	染織之流行・17(12)(菱山相互会)	銘仙の非常時対策
昭和11年(1936).2	染織之流行・18(2)(菱山相互会)	躍進銘仙の要望
昭和11年(1936).2	染織之流行・18(2)(菱山相互会)	銘仙と新興品分野
昭和11年(1936).2	染織之流行・18(2)(菱山相互会)	銘仙の新境地
昭和11年(1936).3	蚕糸経済・第8巻78号(横浜合同通信社)	人絹銘仙生激
昭和11年(1936).3	染織之流行・18(3)(菱山相互会)	銘仙の打開策
昭和11年(1936).5	染織之流行・18(5)(菱山相互会)	銘仙に対する問題
昭和11年(1936).5	染織之流行・18(5)(菱山相互会)	銘仙の意匠に就て
昭和11年(1936).6	染織之流行・18(6)(菱山相互会)	銘仙に対する問題
昭和11年(1936).6	東洋経済新報経済年鑑・20(東洋経済新報社)	商品生及集散(織物)銘仙及スパンクレア生高
昭和11年(1936).6	東洋経済新報経済年鑑・20(東洋経済新報社)	商品相場 東京市内卸売物価表(東洋経済調)織物 及同原料品(銘仙)
昭和11年(1936).7	染織之流行・18(7)(菱山相互会)	銘仙に就て
昭和11年(1936).7	染織之流行・18(7)(菱山相互会)	銘仙界の進む途
昭和11年(1936).8	主婦之友・20(8)(主婦之友社)	流行の花形 総絞り秩父銘仙 三百反贈呈
昭和11年(1936).8	染織之流行・18(8)(菱山相互会)	銘仙の新境地
昭和11年(1936).8	染織之流行・18(8)(菱山相互会)	銘仙消化と価格関係
昭和11年(1936).9	染織之流行・18(9)(菱山相互会)	銘仙界の向上著し
昭和11年(1936).10	実業の日本・39(21)(実業の日本社)	口絵 銘仙の都伊勢崎--業都市巡り(3)
昭和11年(1936).10	染織之流行・18(10)(菱山相互会)	銘仙の根本要素
昭和11年(1936).10	染織之流行・18(10)(菱山相互会)	銘仙の現在と諸対策
昭和11年(1936).11	実業の日本・39(22)(実業の日本社)	伊勢崎銘仙の一人者となつた下城好雄氏
昭和11年(1936).11	染織之流行・18(11)(菱山相互会)	春銘仙に就いて
昭和11年(1936).11	染織之流行・18(11)(菱山相互会)	染織界の傾向と銘仙の将来
昭和11年(1936).12	染織之流行・18(12)(菱山相互会)	春の銘仙について
昭和12年(1937).2	染織之流行・19(2)(菱山相互会)	銘仙に対する問題--巻頭言
昭和12年(1937).2	染織之流行・19(2)(菱山相互会)	銘仙の消費用途に於ける地位
昭和12年(1937).2	日本百貨店組合調査彙報・5(2)(日本百貨店組合)	全国銘仙生高
昭和12年(1937).3	染織之流行・19(3)(菱山相互会)	春の創作銘仙入賞者
昭和12年(1937).3	日本百貨店組合調査彙報・5(3)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和12年(1937).4	染織之流行・19(4)(菱山相互会)	銘仙の品質と地風に就て
昭和12年(1937).4	染織之流行・19(4)(菱山相互会)	銘仙の本質に就て
昭和12年(1937).4	染織之流行・19(4)(菱山相互会)	銘仙の薪織応用に就て

発刊年、月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
昭和12年(1937).4	日本百貨店組合調査彙報・5(4)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和12年(1937).5	染織之流行・19(5)(菱山相互会)	秋銘仙について
昭和12年(1937).5	染織之流行・19(5)(菱山相互会)	銘仙に魅力を創造せよ
昭和12年(1937).5	染織之流行・19(5)(菱山相互会)	銘仙の意匠に就て
昭和12年(1937).5	染織之流行・19(5)(菱山相互会)	銘仙上布について
昭和12年(1937).5	染織之流行・19(5)(菱山相互会)	銘仙界への指標
昭和12年(1937).5	東洋経済新報経済年鑑・21(東洋経済新報社)	商品生及集散(織物) 銘仙及スパンクレア生高
昭和12年(1937).5	東洋経済新報経済年鑑・21(東洋経済新報社)	商品相場 東京市内卸売物価表(東洋経済調) 織物及同原料品(銘仙)
昭和12年(1937).6	染織之流行・19(6)(菱山相互会)	銘仙に対する二三問題
昭和12年(1937).6	染織之流行・19(6)(菱山相互会)	銘仙の三要素と影響について
昭和12年(1937).6	染織之流行・19(6)(菱山相互会)	銘仙の恵まれた立場
昭和12年(1937).6	染織之流行・19(6)(菱山相互会)	銘仙界の反省時代
昭和12年(1937).7	染織之流行・19(7)(菱山相互会)	銘仙について
昭和12年(1937).7	日本百貨店組合調査彙報・5(7)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和12年(1937).8	日本百貨店組合調査彙報・5(8)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和12年(1937).9	染織之流行・19(9)(菱山相互会)	銘仙界は時代に乗って邁進せよ
昭和12年(1937).10	染織之流行・19(10)(菱山相互会)	銃後のキモノは銘仙
昭和12年(1937).10	染織之流行・19(10)(菱山相互会)	関東名の銘仙に就て
昭和12年(1937).11	染織之流行・19(11)(菱山相互会)	関東名の銘仙に就て
昭和12年(1937).11	日本百貨店組合調査彙報・5(11)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和12年(1937).12	主婦之友・21(12)(主婦之友社)	古びけたモスや銘仙の袷を簡単な友禅染法で最新流行柄に
昭和12年(1937).12	染織之流行・19(12)(菱山相互会)	春の銘仙について
昭和12年(1937).12	染織之流行・19(12)(菱山相互会)	足利銘仙界に要望する
昭和12年(1937).12	染織之流行・19(12)(菱山相互会)	関東名の銘仙について
昭和12年(1937).12	日本百貨店組合調査彙報・5(12)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和13年(1938).1	染織之流行・20(1)(菱山相互会)	春の銘仙について
昭和13年(1938).1	染織之流行・20(1)(菱山相互会)	春銘仙の針路について
昭和13年(1938).1	染織之流行・20(1)(菱山相互会)	軌道に乗った銘仙界
昭和13年(1938).2	日本百貨店組合調査彙報・6(2)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和13年(1938).4	染織之流行・20(4)(菱山相互会)	優秀銘仙に一層深く掘下げよ
昭和13年(1938).4	東洋経済新報経済年鑑・22(東洋経済新報社)	商品生及集散(織物) 銘仙及スパンクレア生高
昭和13年(1938).4	東洋経済新報経済年鑑・22(東洋経済新報社)	商品相場 東京市内卸売物価表(東洋経済調) 織物及同原料品(銘仙)
昭和13年(1938).4	日本百貨店組合調査彙報・6(4)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和13年(1938).5	日本百貨店組合調査彙報・6(5)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和13年(1938).6	染織之流行・20(6)(菱山相互会)	秋銘仙の針路について
昭和13年(1938).6	日本百貨店組合調査彙報・6(6)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和13年(1938).7	染織・122(染織文化社)	秩父銘仙から俳人銘仙の句を想ふ
昭和13年(1938).7	染織之流行・20(7)(菱山相互会)	本秋の銘仙界に就て
昭和13年(1938).9	日本百貨店組合調査彙報・6(9)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和13年(1938).10	経済マガジン・10月号(ダイヤモンド社)	国策線に躍り出た伊勢崎銘仙
昭和13年(1938).11	主婦之友・22(11)(主婦之友社)	和服用の銘仙一反で流行の婦人服と六七歳女兒服の仕立て方
昭和13年(1938).11	日本百貨店組合調査彙報・6(11)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和13年(1938).12	染織之流行・20(12)(菱山相互会)	銘仙に就て
昭和13年(1938).12	染織之流行・20(12)(菱山相互会)	銘仙服地の新角度検討
昭和13年(1938).12	日本百貨店組合調査彙報・6(12)(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和13年(1938).12	婦人公論・23(12)(中央公論社)	特集・戦時下国民生活報告書 銘仙工場より
昭和14年(1939).2	商店界・19(2)(誠文堂新光社)	張り切ればこの繁盛-二葉屋銘仙店
昭和14年(1939).2	婦人公論・24(2)(中央公論社)	口絵 銘仙の洋服
昭和14年(1939).2	婦人公論・24(2)(中央公論社)	銃後衣服経済と銘仙洋服
昭和14年(1939).2	婦人公論・24(2)(中央公論社)	銘仙洋服の作り方
昭和14年(1939).5	新女苑・3(5)(実業之日本社)	ホームセクション-銘仙を生かした初夏のスタイル八種

発刊年、月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
昭和14年(1939).5	東洋経済新報経済年鑑・23(東洋経済新報社)	本邦の部 商品生及集散(織物) 銘仙及スパンクレープ生高
昭和14年(1939).5	東洋経済新報経済年鑑・23(東洋経済新報社)	商品相場 東京市内卸売物価表(東洋経済調) 織物及同原料品(銘仙)
昭和14年(1939).5	婦女界・59(5)(婦女界出版社)	着古した銘仙を構成し清々しいアフタヌーンドレスに
昭和14年(1939).6	主婦之友・23(6)(主婦之友社)	元の織緋を利用して流行品に染め替えた銘仙の単長着
昭和14年(1939).8	染織之流行・21(8)(菱山相互会)	秋の銘仙曙会の出品審査講評
昭和14年(1939).8	染織之流行・21(8)(菱山相互会)	秋の銘仙界の動向を検討して
昭和14年(1939).8	染織之流行・21(8)(菱山相互会)	銘仙国民服運動を懲滞す
昭和15年(1940).2	日本百貨店組合調査彙報・2月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和15年(1940).4	日本百貨店組合調査彙報・4月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和15年(1940).4	官報	告示 商工省 第164号 銘仙之販売価格指定
昭和15年(1940).5	染織之流行・22(5)(菱山相互会)	秋冬向銘仙に就て
昭和15年(1940).5	日本百貨店組合調査彙報・5月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和15年(1940).5	俳句研究・7(5)(改造社)	機場の春-有本銘仙
昭和15年(1940).6	染織之流行・22(6)(菱山相互会)	銘仙界興廢の分岐点
昭和15年(1940).6	日本百貨店組合調査彙報・6月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和15年(1940).6	婦女界・61(10)(婦女界出版社)	着物布地更生のドレス20種 銘仙と木綿と縮緬の魅力
昭和15年(1940).7	日本百貨店組合調査彙報・7月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和15年(1940).8	婦人倶楽部・21(8)(講談社)	染料なしで出来る和服類更生法の誌上講習 色焼けした銘仙の更生
昭和15年(1940).9	蚕糸経済・第12巻132号(横浜合同通信社)	現地報告 七・七禁令を踏越えて-立ち直つた足利銘仙
昭和15年(1940).9	染織之流行・22(9)(菱山相互会)	新体制下の服装は銘仙時代
昭和15年(1940).9	日本百貨店組合調査彙報・9月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量
昭和15年(1940).9	婦人之友・34(9)(婦人之友社)	(口絵) 簡素の美 和服地を活かした四つの例 増田祥子さんの銘仙の服
昭和15年(1940).9	連合婦人・124(東京連合婦人会)	伊勢崎銘仙の質実化
昭和15年(1940).9	連合婦人・124(東京連合婦人会)	秩父銘仙の図案展覧会
昭和15年(1940).10	俳句研究・7(10)(改造社)	機場の秋-有本銘仙
昭和15年(1940).10	連合婦人・125(東京連合婦人会)	主張 おたけにならぬ品からおたけになる銘仙への希望
昭和15年(1940).10	連合婦人・125(東京連合婦人会)	堅実銘仙の実現
昭和15年(1940).11	蚕糸経済・第12巻134号(横浜合同通信社)	市況の動き 内地絹物-織着尺、銘仙好調
昭和15年(1940).11	蚕糸経済・第12巻134号(横浜合同通信社)	機業地から9月の銘仙生急
昭和15年(1940).11	日本百貨店組合調査彙報・11月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量-8月中
昭和15年(1940).11	連合婦人・126(東京連合婦人会)	試織銘仙批判会
昭和15年(1940).11	官報	告示 商工省 第741号 銘仙之販売価格中指定
昭和15年(1940).12	蚕糸経済・第12巻135号(横浜合同通信社)	市況の動き 内地絹物-紋織活況、銘仙悪化
昭和15年(1940).12	蚕糸経済・第12巻135号(横浜合同通信社)	機業地通信 足利より-足利銘仙本年度取引高
昭和15年(1940).12	染織時報・648(大日本織物協会)	10月分銘仙産額
昭和15年(1940).12	染織之流行・22(12)(菱山相互会)	絹運動は正絹銘仙中心に
昭和15年(1940).12	日本百貨店組合調査彙報・12月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量-9月及10月
昭和15年(1940).12	婦女界・62(6)(婦女界出版社)	着物から更生服への考へ方 セル・大島・銘仙・紬の活用
昭和15年(1940).12	雷雨警報協同連絡会彙報・3(雷雨警報協同連絡会)	雷と銘仙の本場
昭和15年(1940).12	連合婦人・127(東京連合婦人会)	婦人界便り 東連婦特製正絹銘仙実費即売会
昭和16年(1941).1	工芸ニュース・10(1)(工業技術院産業工芸試験所)	関西支所新国民服装としての銘仙審査会
昭和16年(1941).1	若葉・153(若葉社)	機場の冬-有本銘仙
昭和16年(1941).1	染織時報・649(大日本織物協会)	11月分銘仙産高
昭和16年(1941).1	日本百貨店組合調査彙報・1月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量-11月
昭和16年(1941).2	染織時報・650(大日本織物協会)	昭和15年中銘仙生産額
昭和16年(1941).3	染織時報・651(大日本織物協会)	1、2月中銘仙生産額
昭和16年(1941).3	日本百貨店組合調査彙報・3月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量-昭和15年中
昭和16年(1941).3	日本百貨店組合調査彙報・3月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量-昭和15年12月中

発刊年. 月	雑誌名・巻号(発行元)	記事名
昭和 16 年 (1941). 3	連合婦人・130 (東京連合婦人会)	大日本連合婦人会の銘仙即売と東京連合婦人会
昭和 16 年 (1941). 5	染織之流行・23 (5) (菱山相互会)	待望すべき秋の銘仙界
昭和 16 年 (1941). 5	染織之流行・23 (5) (菱山相互会)	秋の銘仙界について
昭和 16 年 (1941). 5	染織之流行・23 (5) (菱山相互会)	銘仙意匠を更に向上せよ
昭和 16 年 (1941). 5	東洋経済新報経済年鑑・25 (東洋経済新報社)	本邦の部 商品生及集散(織物) 銘仙及スパンクレープ生高
昭和 16 年 (1941). 5	東洋経済新報経済年鑑・25 (東洋経済新報社)	商品相場 東京市内卸売物価表(東洋経済調) 織物及同原料品(銘仙)
昭和 16 年 (1941). 5	日本百貨店組合調査彙報・5月号(日本百貨店組合)	全国銘仙生数量-昭和 16 年 3 月
昭和 16 年 (1941). 6	染織之流行・23 (6) (菱山相互会)	銘仙に適当な原料糸を造れ
昭和 16 年 (1941). 6	官報	告示 商工省 第 481 号 銘仙之販売価格指定ノ件中改正
昭和 16 年 (1941). 7	蚕糸経済・第 13 卷 142 号(横浜合同通信社)	蚕糸界ニユース 銘仙、交織絹物値下
昭和 16 年 (1941). 7	染織之流行・23 (7) (菱山相互会)	絹セルと秋冬向銘仙
昭和 16 年 (1941). 7	染織之流行・23 (7) (菱山相互会)	銘仙について
昭和 16 年 (1941). 7	染織之流行・23 (7) (菱山相互会)	銘仙本来の使命に鑑みて
昭和 16 年 (1941). 7	官報	告示 商工省 第 654 号 銘仙之販売価格指定ノ件中改正
昭和 16 年 (1941). 9	婦女界・64 (3) (婦女界出版社)	重宝な更生服特集 銘仙の柄の似合せ方
昭和 16 年 (1941). 9	婦女界・64 (3) (婦女界出版社)	重宝な更生服特集 銘仙の模様に合わせてドレスの選び方
昭和 16 年 (1941). 7	官報	告示 商工省 第 656 号 銘仙ノ最高販売価格指定
昭和 16 年 (1941). 9	官報	告示 商工省 第 830 号 銘仙ノ最高販売価格指定中改正
昭和 16 年 (1941). 10	経済月報・1 (4)	統制経済法令に関する各省通牒三 商工省関係 銘仙査定ニ関スル件
昭和 16 年 (1941). 10	連合婦人・136 (東京連合婦人会)	実用銘仙バザー-予告
昭和 16 年 (1941). 10	官報	告示 商工省 第 903 号 銘仙ノ最高販売価格指定中改正
昭和 16 年 (1941). 12	染織之流行・23 (12) (菱山相互会)	全国民を掩ふ銘仙
昭和 17 年 (1942). 1	電力合理化・3 (1) (電気普及会)	足利銘仙工場の改善实例
昭和 17 年 (1942). 3	主婦之友・26 (3) (主婦之友社)	緋銘仙の長着を構成した十三四歳用女児服の仕立て方
昭和 17 年 (1942). 4	若葉・168 (若葉社)	作品-銘仙
昭和 17 年 (1942). 4	主婦之友・26 (4) (主婦之友社)	和洋衣類の更生実験 12 種 昔物の地味な銘仙緋を刺繍で若向に更生
昭和 17 年 (1942). 4	主婦之友・26 (4) (主婦之友社)	和洋衣類の更生実験 12 種 銘仙の着物の残り布で便利な軽装帯
昭和 17 年 (1942). 4	婦人公論・27 (4) (中央公論社)	特集 衣類更生と生活の再建 縞の銘仙からレインコート
昭和 17 年 (1942). 5	婦人倶楽部・23 (5) (講談社)	特集 古い衣類を更生した春の婦人子供服の作り方講習 縞銘仙の和服から二部式の応用服
昭和 17 年 (1942). 6	蚕糸経済・第 14 卷 153 号(横浜合同通信社)	論壇 銘仙価格の検討
昭和 17 年 (1942). 6	婦女界・65 (6) (婦女界出版社)	特集 着物更生全集 銘仙から更生のワンピース
昭和 17 年 (1942). 7	蚕糸経済・第 14 卷 154 号(横浜合同通信社)	論壇 銘仙価格の検討 2
昭和 17 年 (1942). 7	染織時報・667 (大日本織物協会)	統制 銘仙新規格 10、11 両号指定生決定
昭和 17 年 (1942). 8	日本蚕糸学雑誌・13 (4) (日本蚕糸学会)	第 43 回小集会講演要旨: 銘仙価格の検討
昭和 17 年 (1942). 9	若葉・173 (若葉社)	批評と鑑賞-銘仙
昭和 17 年 (1942). 9	染織時報・669 (大日本織物協会)	業界の声 銘仙の指定
昭和 17 年 (1942). 12	俳句研究・9 (12) (改造社)	作品 有森銘仙
昭和 18 年 (1943). 2	若葉・178 (若葉社)	機場の冬-有本銘仙
昭和 18 年 (1943). 6	知性・6 月号(河出書房)	機場の夏-有本銘仙
昭和 18 年 (1943). 6	日本タイ協会会報・34 (日本タイ協会)	伊勢崎銘仙南方に新發展
昭和 18 年 (1943). 6	俳句研究・10 (6) (改造社)	中堅新鋭自選作品 有本銘仙
昭和 19 年 (1944). 1	婦人倶楽部・25 (1) (講談社)	銘仙の和服から家庭着兼用の婦人防空服
昭和 20 年 (1945). 2	ホトギス・48 (5) (ホトギス社)	戦地よりその他

註)

- 1) 銘仙を取り上げた展覧会に「VIVID 銘仙」(足利市立美術館・2016年4月12日6月4日)「須坂クラシック美術館開館20周年記念特別展 きものモダニズム」(公益財団法人泉屋博物館分館・2015年9月26日～12月6日)「特別展 銘仙」(埼玉県立歴史と民俗の博物館・2021年 ※新型コロナウイルス感染拡大のため中止となった。同館では展示内容を変更し2022年に「企画展 銘仙」を開催している。)
- 2) 財団法人吉田秀雄記念事業財団2004「特集 明治期の広告－近代広告の幕開け－」財団法人吉田秀雄記念事業財団『AD・STUDIES』9: 23-26
- 3) 安藏裕子2012「(研究ノート) 昭和初期の新聞・雑誌記事にみる「銘仙」について」昭和女子大学内光葉会『學苑』(GAKUEN) 863: 59-131
- 4) 銘仙の流行と集散地問屋情報誌との関わりについては、山内雄気(山内2009)が詳しい。山内の指摘によれば、銘仙市場における百貨店の影響力が増大するにつれて、危機感を強めた特定の集散地問屋(稲西合名)は、百貨店から機業家への流行伝達に能動的に関わろうとした。こうした取組の一つに、稲西合名は、全国の取引先の機業家を会員として組織した菱山相互会による、会員誌の発行があった(山内2009: 26-27)
- 5) 藤岡里圭2016「大正期の婚姻需要と百貨店の発信」『国立歴史民俗博物館研究報告』197: 128
- 6) 瀬崎圭二2000「三井呉服店PR誌『花ごろも』の刊行－中山白峰・尾崎紅葉「むそう裏をめぐる」－」『日本文学』49(6): 23
- 7) 土屋礼子1999「百貨店発行の機関雑誌」山本武利・西沢保編『百貨店の文化史』世界思想社: 223-224
- 8) 後に自由学園や婦人之友社の創立者となった羽仁もと子氏による記事である。同記事では、物価騰貴の状況にあって中流家庭では衣類に関する支出を減らす必要があると主張する。記事中、羽仁は「晴れ着に銘仙主義」の項目を立て、中流夫人の最上の外出着として銘仙を着用することを勧めていた。
- 9) 当時の膨大な婦人雑誌の発行部数を消化した層は、大正中期以降飛躍的に増加し婦人雑誌を購読できる一定の生活水準と教育水準をクリアした新中間層が中心であったとされる(前田2001: 225)
- 10) 長崎巖2015「日本の緋と銘仙」須坂クラシック美術館『きものモダニズム』: 10
- 11) 外谷育美2015「技法と流行の変化」須坂クラシック美術館『きものモダニズム』: 142
- 12) 鷺田は、様々な定義があると述べてつも、ここでは、「その社会の所得分布の上位10%以下の人口で構成された富裕層や、下位30～40%程度を占める貧困層や農村部人口を除いた、中間に位置する層」を指すと述べている(鷺田2020: 155)。
- 13) 鷺田祐一2020「消費市場の発達と技術・価格・デザイン」嶋田昌和編『きものとデザイン』: 160
- 14) 藤岡里圭、二宮麻里2020「着物の流行と百貨店の役割」嶋田昌和編『きものとデザイン』: 182
- 15) 鷺田祐一2020「消費市場の発達と技術・価格・デザイン」嶋田昌和編『きものとデザイン』: 163
- 16) 山内雄気2009「1920年代の銘仙市場の拡大と流行伝達の仕組み」経営史学44(1)
- 17) 山内雄気2018「大衆商品「模様銘仙」の登場」2018: 『同志社商学』69 328-330)
- 18) 6-2、6-3では、産地・雑誌編集社・百貨店の連携で行われた銘仙の販売企画について取り上げる。本稿では伊勢崎銘仙と『主婦之友』、八王子銘仙と『婦女界』の例を論述するが、昭和8年(1929)9月号の『婦人世界』にて、足利銘仙も同様の企画を行っていたことが明らかとなっている。今回の調査では『婦人世界』掲載記事の網羅的な調査まで至ることができなかったため、調査結果には含めていない。その他、足利織物同業組合は、当時の人気画家に宣伝ポスターを依頼する等の独自の宣伝活動も行っていたことで知られている。足利銘仙の取り組みについては、『VIVID 銘仙』(足利市立美術館2016)、「画家たちの描いた銘仙美人－足利銘仙の宣伝ポスターから－」(大森哲也2004『別冊太陽 銘仙 大正昭和のおしゃれ着物』平凡社)、『特別展 銘仙』(埼玉県立歴史と民俗の博物館2021: 58-59)に詳しい解説が掲載されている。
- 19) 木下響子2018「吉屋信子『空の彼方へ』における〈久遠の女性〉」國文學102: 287-301.
- 20) 美甘由紀子2013「第1回内国勸業博覧会と八王子」八王子郷土資料館『八王子郷土資料館だより』92: 4-5)
- 21) 木村涼子2006「女が読む小説による欲望の編成－1920～30年代「通俗小説」の世界」『大阪大学大学

- 院人間科学研究科紀要』32; 148
- 22) 前田愛 1968「大正後期通俗小説の展開 (上)」岩波書店『文学』36 (6); 38
- 23) 前田愛 1968「大正後期通俗小説の展開 (上)」岩波書店『文学』36 (6); 37
- 24) 宮崎俊弥 2014「伊勢崎織物史Ⅱ」『いせさき銘仙』みやま文庫; 38
- 25) 渡辺純子「戦時期日本の産業統制の特質－繊維産業における企業整備と「10大紡」体制の成立－」『土地制度史学』38 (2)
- 26) 宮崎俊弥 2014「伊勢崎織物史Ⅱ」『いせさき銘仙』みやま文庫; 42-43
- 27) 松成義衛著 1957『日本のサラリーマン』青木書店; 31-32
- 28) 小泉和子 2004「銘仙の改装差」湯原公浩『別冊太陽 銘仙 大正昭和のおしゃれ着物』平凡社; 102
- 土屋礼子 1999「百貨店発行の機関雑誌」山本武利・西沢保編『百貨店の文化史』; 223-252 世界思想社
- 長崎巖 2015「日本の絆と銘仙」須坂クラシック美術館『きものモダニズム』; 8-11
- 藤岡里圭 2016「大正期の婚姻需要と百貨店の発信」『国立歴史民俗博物館研究報告』197; 127-143
- 藤岡里圭、二宮麻里 2020「着物の流行と百貨店の役割」嶋田昌和『きものとデザイン』ミネルヴァ書房; 167-188
- 前田愛 1968「大正後期通俗小説の展開 (上)」岩波書店『文学』36 (6)
- 前田愛 1968「大正後期通俗小説の展開 (上)」『文学』36 (7) 岩波書店『文学』36 (6); 31-44
- 松成義衛著 1957『日本のサラリーマン』青木書店
- 宮崎俊弥 2014「伊勢崎織物史Ⅱ」『いせさき銘仙』みやま文庫
- 美甘由紀子 2013「第1回内国勸業博覧会と八王子」八王子郷土資料館『八王子郷土資料館だより』92; 4-5
- 山内雄気 2009「1920年代の銘仙市場の拡大と流行伝達の仕組み」経営史学 44 (1); 3-30
- 山内雄気 2018「大衆商品「模様銘仙」の登場」2018『同志社商学』69; 321-337
- 鷺田祐一 2020「消費市場の発達と技術・価格・デザイン」嶋田昌和編『きものとデザイン』ミネルヴァ書房; 153-166
- 渡辺純子 1996「戦時期日本の産業統制の特質－繊維産業における企業整備と「10大紡」体制の成立－」『土地制度史学』38 (2); 1-17

(受付 2023.3.24 受理 2023.7.11)

参考文献

- 足利市立美術館 2016『VIVID 銘仙』青幻舎
- 安蔵裕子 2012「(研究ノート) 昭和初期の新聞・雑誌記事にみる「銘仙」について」昭和女子大学内光葉会『學苑』(GAKUEN) 863
- 大森哲也 2004「画家たちの描いた銘仙美人－足利銘仙の宣伝ポスターから－」『別冊太陽 銘仙 大正昭和のおしゃれ着物』平凡社
- 木下響子 2018「吉屋信子『空の彼方へ』における〈久遠の女性〉」『國文學』102
- 木村涼子 2006「〈女が読む小説〉による欲望の編成:1920～30年代「通俗小説」の世界」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』32
- 小泉和子 2004「銘仙の階層差」湯原公浩『別冊太陽 銘仙 大正昭和のおしゃれ着物』; 102 平凡社
- 埼玉県立歴史と民俗の博物館 2021『特別展 銘仙』埼玉県立歴史と民俗の博物館
- 財団法人吉田秀雄記念事業財団 2004「特集 明治期の広告－近代広告の幕開け－」財団法人吉田秀雄記念事業財団『AD・STUDIES』9
- 瀬崎圭二 2000「三井呉服店 PR 誌『花ごろも』の刊行－中山白峰・尾崎紅葉「むそう裏をめぐって」－」『日本文学』49 (6); 21-23
- 久谷育美 2015「技法と流行の変化」須坂クラシック美術館『きものモダニズム』; 142-144

